
スモーキークォーツ

河 美子

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

スモークークオーツ

【Nコード】

N0130X

【作者名】

河 美子

【あらすじ】

新宿の雑居ビルが立ち並ぶなか、佐木田英輔のスリーエス事務所がある。今日の依頼主は矢野花絵だった。

「鉄骨の回廊」「雨にぬれた綿毛」の佐木田英輔シリーズ第三弾です。

登場人物の紹介

佐木田英輔

何でも引き受ける便利屋をスリーエス事務所を開いている。
独身で女好きの四〇代後半。喫茶店梓には毎日通う。

久ちゃん

佐木田の一番のお得意客。気のいい四〇が目前のホステス。
クリーニングの引き取りや寂しい時の相手など、何でも佐木田に
電話する。

梓ママ

喫茶店梓のママ。

気立てがよくこの物語に出てくるみんなの胃袋を支えてる。

佐木田に好意があるようなないような。

石上刑事

一人娘がいる愛妻家。梓の常連客。

テレビのタレントに似ていることから梓ママからは石ちゃんと呼
ばれている。

藤原組長

大学出のインテリやくざ。だが、義理人情は厚く佐木田の話相手。
梓の常連客。

ブローグ

新宿は夜になれば華やかな街に変わる。

さきたえいすけ

そんな歓楽街の少し奥まったところに佐木田英輔のスリーエス事務所がある。便利屋なのだが、黒い裏稼業にも精通しているから、いろいろなところから依頼は来る。一番の依頼主は久ちゃん。

今日も佐木田は暇で朝からぼーっと過ごしていると久ちゃんから電話が入った。

「ねえ、英ちゃん、ちょっと来て」

「おー、いいとも」

喜んで出かける。

出かける前には栄養ドリンクを一本。

「うまい！」

久ちゃんは四〇が目の前。それでも、気立てのいいホステスだ。最近は少しふくらんできて本人はダイエットをするというばかりで、一つも長続きしない。だが痩せたホステスなんて面白くない。佐木田はトントんと足取りも軽く上がっていくと、久ちゃんが立っていた。

「おやおやお出迎えですか。さあさあ、部屋へ入りましょ。どこのマッサージしようかなあ」

「英ちゃんたら違うわよ」

「何を照れてるんだよ。ドリンクも飲んできたんだから」

佐木田は背中を押して部屋へ入る。

久ちゃんの丸い乳房にワンピースの開いた胸元から手を入れる。

「違うんだったら」

「何だよ、今日はいいいんだろ。それともアンネの日記か」

「もう、そんなふざけた話じゃないの」

嫌がるそぶりを見せながらも、体を触ることは許してくれる久ちゃん。

佐木田が久ちゃんを後ろから抱きながら尋ねてみる。

「ホントに仕事の話か」

「うん。うちのすみれちゃんから頼まれたの」

「ふーん」

そう言いながらも後ろから乳房を触る左手を休めない。右手はさらにショーツへと伸びていく。

「ちよつと、触られたら落ち着いて話ができないじゃない」

「ふんふん、そうなんだねえ、久ちゃんここは？」

「嫌だったらあ、英ちゃんたら」

そう言いながら振り向き、唇を塞ぐ。

ピンポーン。

「何だよ」

「忘れてた、すみれちゃんよ」

「後にしてもらおうよ。ホラ、俺だってこんなに」

「ダメ」

久ちゃんは立ちあがってドアへ向かう。

佐木田は思い切りテンションが下がって不機嫌そうに寝転がる。

入って来たのは、三〇くらいだろうか、痩せたホステスだった。

佐木田の好みではないが、顔立ちは整っており細面にショートの髪が余計に小顔に見せた。目は切れ長で日本的な美人だ。和服でも似合いそうだ。

「こんにちは」

「あ、どうも。佐木田です」

「私、矢野花絵やのはなえです。店ではすみれって名前ですけど」

久ちゃんはキッチンに立ちコーヒーを入れている。

「私に何か用があるとか」

「ええ、佐木田さんのお力をお借りしたいんです。弟を見つけてください」

「捜索願は警察の方が早いかもしれませんよ」

「ええ、でも弟は死んだことになってるんです」

「は？」

矢野花絵には三歳下の弟正勝まさかつがいた。弟は高校卒業すると、姉のいる東京に来て働きた。初めは焼肉店の厨房に見習いとして入ったが、いつの間にか仕事が辛いとか言つて、パチンコ店、スナックというように落ち着かなかつた。だんだんと姉にも借金するようになり、四力月前から行方も分からなくなつた。

最後に会つた時、真剣な表情でさらに二百万の借金を申し込んだ。今までで百四十五万貸していた。花絵にしてもそんなに金があるわけではなく、無理だと突っぱねると泣いてこつ言つたという。

「姉さん、この金がないと俺は殺されるかもしれない」

「一体何をしたの。誰に払う金なの」

「人を撥ねたんだ。それが社長の息子だつた。でも、どう見てもあつちが飛び込んだきたんだ」

「交通事故なの？ その人は無事なの？」

「ああ、無事どころか酒も飲んでるよ。それなのに金を要求されてサラ金でも借りて今まで百五十万払つた。だけど、仕事ができないからつてさらに二百万。その親父が貸しビルも持つてるとかで。この間俺の勤めてる居酒屋にやつて来たんだ」

大事な息子に怪我をさせた上に、息子の仕事ができなくなつたらその保証金を出せというのだ。金はないから待つてくれるように頼むと、その社長は連れてきた男たちに店で暴れさせ、脅しを掛けたという。店長はすぐに正勝を辞めさせ、二度と来ないでくれと追ひ出されたというわけだ。

「それで、弟さんが死んだというのはどういうことですか」

「ええ、行方不明だからと警察に行きました。すると、一週間ほどして、警察から電話がかかつて来て焼身自殺した遺体が見つかつたつて」

着衣や、時計、靴、運転免許証も弟のものだつたという。車のそばには遺書も残されていて弟の筆跡だつたそうだ。

差し出された遺書にはこう書いてあつた。

「姉さん、もう生きていくのが嫌になりました。ごめんなさい」
確かに弟の字だという。

「うーん、それなのに、生きてるといふのはどういう根拠があつて」
「ええ、電話がかかつてきたんです。姉さんって」

「新聞にも出た後だったからおかしいと思つて、警察に行つたんです。でも、証拠がなくなしかもいたずら電話かもしれないと言われて」
だが、佐木田は首をかしげた。

もしも弟が死んでいないのなら、死んだのは誰なんだろうと。弟を生かしておく必要が誰にあるんだろう。弟の狂言なのか。

「お金はここに二十万あります。もし見つかったら、さらに二十万お支払いします。交通費など十万お渡しします。これで見つけてもらえませんか。貯金はこれしかないのです」

佐木田は花絵を見つめて、わかりましたと言つて受け取つた。

花絵が帰ると、久ちゃんがすり寄つて来た。

「英ちゃん、引きつけてくれてありがとう。続きする?」

「うーん、その気はなくなった。金のために働くぞ。じゃな」

「意地悪」

佐木田はドアを閉めて、トントンと階段を下りて行つた。

第一章

佐木田が向かったのは藤原組長の事務所。

組長はこの裏社会にどっぷり漬かつてはいるが、昔堅気のやくざでいきつけの喫茶店「梓」の常連客だ。

ときどき情報を教えてくれるので、スリーエス事務所としては報酬を払わなければいけないくらいだが、そこはお互い大人の付き合いがあるとしたものだ。

「こんにちは、組長いる？」

「ああ、佐木田さん。組長は昨日から病院です」

答えたのは若頭の遠藤だ。

「どうしたんですか」

「盲腸ですよ。早く病院に行けばよかったのに我慢してしまつて腹膜になりそうでしたよ」

「それは大変だったね、どこの病院？」

「あの高橋病院です」

「え？ あそこだけはイヤだつて言つてたのに」

「ええ、でも、急だつたんで仕方なしに」

高橋病院の院長は組長の同級生で、お互いが頭が悪いと悪態をつくほどの友だちなのだ。

「それで、いつ頃退院できるの？」

「院長は四日ほどという話でしたが、組長は保険で稼ぐつて」

「ははは、流石によく考えてるなあ。じゃあ、面会はできるのかい？」

「ええ、明日なら」

「ありがとう、明日花束を持って行くわ」

「ありがとうございます」

事務所を出ようとしてふと引き返した佐木田。

「ねえ、この人知らない？」

花絵から預かった写真を見せた。

「若造ですね。なんかやらかしたんですか」

「うん、死んだことになってるんだけど」

「ということは生きてるってことですか」

「うん、そうらしい」

「うちの若いもんに当たってみましょうか」

「お願いできるかな」

「お安いご用ですよ」

佐木田は正勝の名前も後ろに書いて渡した。

事務所を出ると、梓に行った。まだ、朝から何も口に入れてはいなかった。

梓は挽きたてのコーヒーの匂いが店に充満していた。ママの梓は手際よく卵トーストを作っている。

「ママ、僕もモーニングちょうだい」

「ごめん、英ちゃん。今日はトーストがこれで最後なのよ」

「えーっ、僕の分取ってくれてないの」

佐木田は怒ったように言う。

「だって、大学生のアメフトクラブがいっぱやって来てね。さっき帰ったんだけどモーニングのお代わりってみんなが食べちゃって」

「学生がこんな喫茶店に来ちゃ困る！ 一人一食だろう、普通は！」

意味不明な事を言う佐木田。

すると、ママはこっさりクロワッサンを出した。

「これでもいいかしら、どうぞ」

「お、クロワッサンか」

途端に機嫌が直る佐木田。

「昨日、デパ地下で買ったのよ」

「野菜サラダも無くなったけど」

「いやあ、これだけで十分さ。ママは俺に惚れてるね」

それには答えず、洗い物をし始める。そこへえりちゃんが帰って

来た。このえりちゃんは今月から梓でバイトをしている女子大生。朝十一時までのバイトだ。モーニングを近くの店に届けに行っていたらしい。

「佐木田さん、おはようございます」

「お、えりちゃん、いつもいても可愛いねえ」

話は半分に聞いておきますと言われるしまった佐木田。ママは笑っている。

佐木田はコーヒーを飲み終わると、スリーエス事務所を開けた。

住宅兼事務所なので、いつでも開いていると言えばそうだが、一応気分的なものだ。

机には配ってと頼まれてるティッシュが山盛り。

これは梓の入り口にも置いている。どこで配ろうと構わないのだ。隣のパチンコ屋にも置かせてもらってる。それで金を取るのかと言われそうだが、それでもいいのだ。サラ金のティッシュペーパーなんてそんなものだ。

ティッシュで思い切り涙をかむと、電話が鳴った。

「もしもし、スリーエス事務所です」

「あの、うちのミーコがいないのよ」

「ああ、寺田さん。また逃げましたか」

近くのばあさんの飼い猫だ。あちこちに子どもを作る浮気な猫だ。もともと野良猫だったものだから、ばあさんは飼い猫と思っけていても、ミーコにしては全くその気はないのかもしれない。だが、この猫を見つけて連れて行くと一万円なのだ。高い料金設定は人を見て決める佐木田だ。このばあさんの頼み事は寺田宝石店に請求することになっている。嫁はエステ通いではあさんを疎んじて、もともとは同居していたのに別のマンションを借りたのだった。夫は若い妻に何も言えず、金で繋ぎとめてるようなものだ。だから、佐木田はこのばあさんの依頼は快く受け、金はしっかり受け取るのだ。

きつとあそこの公園だなど目星をつけて自転車で行く。

「いろいろな依頼を一手に引き受けるすご腕だな」

自分で自分を褒めるしかない。

「ミーコ」

探しながら公園を見まわす。繁華街の公園なんて汚いものだ。あちらこちらに酔っぱらいのおう吐物があり、金の無い若者のコンドームが落ちている。

「みゃー」

ミーコの声がする。

捨て猫を連れて歩くミーコ。オスなのにミーコと名付けられた猫は雌猫を連れて出てきた。

「おい、また相手が違っぞ」

「みゃー」

「くそ、この浮気猫め」

そう言いながら自転車のかごに乗せる。

持ってきたシーチキンの缶詰を開けて、雌猫に渡すとミーコがみゃーと鳴いた。まるで礼を言ってるようだ。

「ふーん、お前もいいところあるじゃん」

佐木田は寺田宝石店にはこの缶詰の値段を三千円と報告することに決めた。

第二章

翌日、寺田宝石店から電話があった。

「もしもし、佐木田さん、寺田です」

「はいどうも」

あの缶詰が高いつて言うのかなあと少し姿勢を正して、受話器を持ち換える。

「あの、母のことではなくて、頼みたいことがあるんですが」

「えっ、なんかあったんですか」

「ええ、ちよつと電話では」

「では、後で伺います」

そうか、宝石店の依頼ならかなりの料金が見込めるなと佐木田は取らぬ狸の皮算用だ。

すると、ケータイも鳴る。

「あの、矢野花絵です」

「あ、花絵さんですか。まだ、捜査中で」

「ええ、いいんです。私、明日から大阪へ行くので報告だけしておこうと思ひまして」

「あ、そうですか。旅行ですか」

「ええ、まあ」

「お気をつけて」

電話は切れた。別に放つてゐるわけではない。若頭にも頼んでいるし、今日は居酒屋へも行く予定だった。だが、花絵は待っているんだろうなあと思うと、佐木田は腰をあげた。

まずは、寺田宝石店だ。

最近改装して若い子も入るようになった店だ。店内はブランドの宝石が主流だ。夜の蝶が旦那に買ってもらうことが多いから値段もなかなかハイレベル。かといつてお手頃の若向きのデザインも置いてある。寺田宝石店はこの不景気の中、結構儲かっているようだか

ら、あの男は経営手腕はなかなかのものかもしれない。

ガラス張りの大きなドアを開けると、紺の制服を着て白い手袋をした売り子が白髪のお紳士に金の大きなブローチを見せているところだった。

「いらつしやいませ」

寺田は佐木田を見ると、笑顔で近寄って来た。

「すみませんね、わざわざお越しいただいて」

「いいえ、繁盛しているみたいですね」

「そんなことはありません」

そう言いながら佐木田を奥の部屋へ通した。

大理石の床に高そうなソファ、大きなサイドボードにはコレクションの腕時計が並んでいる。

「ほう、ロレックスがいっぱいだな」

佐木田はこういうものには全く興味がなかったが、一応は羨ましいそぶりも見せる。

「実は家内が家を出まして」

「え、家出ということですか」

「まだ、そこまでは」

歯切れの悪い言葉だ。多分あの若い妻は男でもできたのだろう。

「いつからですか」

「昨日です」

「あ、それじゃ、まだわかりませんね。飲み過ぎてどこかのホテルに泊まってるかもしれないし」

「ええ、そういうことも考えられますが」

「でも、家出だと思っのですね」

佐木田は寺田の顔を見ながら聞いた。ときどきため息をつきながら話す寺田は、五十歳になって初めて結婚したのだった。結構女にはモテると思うが、縁がなかったのかそれとも世間体だけで結婚したのか。そう考えるのには噂があったからだ。寺田宝石店の息子は男好きだという噂。

必死になつて母親が見合いを勧めたが、どれも断つて困るという話は梓で聞いたことがあつた。

だが、結婚してからのはあの奥さんと仲良くやつてゐるから、男好きではなかつたのねとママも言つてたっけ。

ぼうつとそんなことを考えていると、寺田は立ち上がつて一枚の紙を出した。

「これ見てください」

それは妻からの離婚届だつた。

「もう判も押してます。でも、そんな話全く出たことがなかつたんです。信じられません」

「これはどこに？」

「家内のクローゼットの中に」

よく見ると、日付は書かれていない。ということはいつのことが分らないわけだ。

「奥さんの方にそんな気持ちがあつたということですかね。ちよつといろいろ調べるのに交通費と通信費用がかかります。その分は先に二十万預かります。雑費などもかかりますがいいですか。こういう調査は諸経費が随分と掛かりますけど」

すると、寺田は引き出しの中から百万の札束を出した。

「取りあえず、これだけ先にお渡しします」

佐木田はわかりましたと言つて懷に収めると宝石店を後にした。

これだから寺田宝石店とは縁が切れない。ミーコより難しい調査だが、何だかきな臭い匂いがすると感じていた。

次は居酒屋だつた。そこは正勝が働いていた場所だ。店内は大漁旗が飾られて魚のプラスチック模型があちらこちらからぶら下がり、若者が喜びそうな雰囲気だつた。値段は安く威勢のいい店員が大勢いた。

「店長はいますか」

席に座ると生ビールを頼みながら、佐木田は尋ねた。

「はい、何か御用ですか」

「ああ、ちょっと話があるんで呼んでくれるかな。それと、枝豆頂戴」

「はい、生一丁、枝豆一丁」

大きな声でカウンターに叫ぶ。そして、奥に入って行った。奥から少し胡散臭そうに佐木田を見る男がいる。

「あれが店長か」

佐木田は手を上げた。店長は仕方なくやって来た。

「いらっしやいませ。どういうご用でしょうか」

「バイトにいた矢野君、正勝君のことだけど」

「あの子はうちとはもう関わりがございません」

そう言って困ったように顔をしかめる。

「いやいや、違うんだ。いちゃもんを付けにきたんじゃないよ。お姉さんに頼まれたんだ」

「は？」

「矢野花絵さん。弟を探してほしいって」

「でも、あの子はこの前焼身自殺したとか」

「うん、らしいね。でも生きてるかもしれないんだ」

ぎょっとした表情で見つめる店長。ネームプレートには中田と書いてある。

「中田さん、矢野君と連絡した？」

「どうしてですか。死んだと聞いてから一切会ってませんよ」

「そうか、でも、忘れてるかもしれないじゃない。思い出したことあつたらここに連絡して」

そう言っつて佐木田はパソコンで作った名刺をを渡した。

「スリーエス事務所ですか」

「うん、僕が所長。まあ、僕しかないんだけど」

そう言っつてビールをもう一杯と注文した。店長はじつと名刺を見ながら警察じゃないんですねと呟いた。

第三章

佐木田が居酒屋を出ると、すでにこの街は夜の華やかな顔になっていた。

若い女のミユールの音がせわしなく聞こえる。

若い男たちはコンパの帰りなのか、あちらこちらで女性に行こうよと声を掛けている。大体その中で無口な男が一人はいるもんだ。その男の周りには女子が集まる。不思議な光景だ。欲しがってるのは同じだが、声に出すか出さないかで信頼度が変わるのか。

事務所に戻ると、若頭の遠藤がやって来た。

「あ、どうも。佐木田さん、この前の写真だけど」

「ああ、遠藤さん。何か掴めましたか」

遠藤は派手なアロハに白いパンツ。金のネックレスがいかに夜の帝王という感じた。その赤いアロハのポケットから出した写真。「え、この子の隣にいるのがさおりって子でね、その女の子と仲が良かったという話なんだ」

「さおりって、どこの店の子ですか」

「うん、海賊の家って知ってるでしょ」

「あの派手なソープ」

「そう、そこのご指名ナンバーワンの子」

「へえ、また後ろにやばいのがいそうだな」

「うん、このさおりと正勝がどうも付き合っていたらしいんだけど。金の無い正勝にムリだわ」

遠藤の話は分かりやすかった。正勝はさおりとできていたようだが、店での指名がナンバーワンとなれば、例の交通事故の怪しい親子が関わってきそうだな。

「その正勝の事故った相手は野沢良太のむらたっていうらしいんですがね、そいつの話も聞いてませんか」

「それよ、その野沢の父親が地上げ屋で有名な野沢コーポレーション」

ンさ」

「ああ、あれですか」

評判がよくなって、藤原組長は大嫌いな奴だとなるべく関わりを持たないようにしているという。やくざの中でもよくない奴というのが気にかかるが。

「とんでもない野郎に引っかけたという話だな」

「それなら、そのさおりはソープに行けば会えるんですか」

「それが姿が見えないということで、野沢新太が探してるんだとよ。女と逃げるために死んだことにしたんじゃないかな」

駆け落ちか。

男の嫉妬ほど醜いものはないが、どうもその線が怪しいようだ。さおりと正勝の接点とはどこからか。

遠藤に礼を言いながら、棚の奥から酒を一本取り出した。

「これ、この前貰ったもんだけど、どうぞ」

「いやいや、こんなことぐらいで貰っちゃ組長に叱られるよ」

「いいじゃないですか。貰いもので悪いけど」

につこり笑って遠藤は受け取ると、事務所を出て行った。

花絵に電話をしたが、花絵の電話は電源が切れていた。

「大阪に行くって言ってたな」

さおりのことを聞いていないだろうか。聞いてみたいと思った。僅かな光が見えてきたようだ。

事務所の窓から見ると、喫茶梓の光が見えた。

「まだ、開いてるのか。なんか食べに行こうか」

事務所のシャッターを閉めると、梓に向かった。

梓はママが一人で煙草を吸いながら、水割りを飲んでいた。

「どうしたんだい、こんな夜まで」

「うん、最近、経営が厳しくてね、ちよっと憂鬱になって」

「それで、一人で飲んでいたら、余計に店は傾くよ」

そう言われると、ママはおかしそうに笑った。

「英ちゃん、何飲む？」

「ビール」

「仕事はどうなの」

「繁盛してるぜ。寺田の奥さん、見たことないかい」

「あの若奥さん、そう言えばホテルの通販パーティーに来てたらしいわよ」

「いつのこと」

「昨日だと思うけど。うちにも葉書が来てた」

テレビの通販でおなじみの会社だ。宝石やファッション、靴に置物、何でもありそうだ。栄養食品、ダイエツト器具まである。梓のママは最近、ウエストが細くなるというロープのようなものを四九〇〇円で買ったらしい。

「ママもよく買うの」

「うん、店が終わってから見れるものって、これぐらいよ。二四時間放送だから結構面白いのよ」

「そんなものかねえ。寺田の奥さんもこれのお得意さんってことか」

「うん、ここへ来る江田青果の奥さんが寺田さんを見たって言うってたもん」

「すごいねえ。みんな行ってるのか」

「それがね、寺田さんはブラックのカードで買いまくってたらしいの」

「ほう、ゴールドのさらに上か。金持ちだなあ」

「私も買いたいわ。英ちゃん、何か買って」

「僕を売るから買ってよ」

「いやよ、どうせみんなにそんなこと言ってるんでしょ」
酔ったママは魅力的だ。ついついからかいたくなる。

肩に手を回そうとしたとき、ママはすくと立ち上がった。

「そうだ、英ちゃん。いいものがある」

「なんだよ、ママの方がいいのになあ」

冷蔵庫を覗きこんだママは小さな器を取り出した。

野沢菜だ。

「野沢菜茶漬け食べるでしょ」

「うまそうだな」

ママは手際よく作っていく。そこへ石上刑事がやって来た。

「二人だけで何してるんだい」

「あら、石ちゃんもたべるでしょ。お茶漬け」

「うまそうだな」

石上刑事もこの常連客だった。ぼつちやりしてテレビのタレントにそっくりだから石ちゃんと呼ばれていた。

佐木田はグラスを取って、石上にビールを注いだ。

「ちよつと聞いてほしいことがあるんだ、石ちゃんに」

「佐木田さんの話はいつも怖いよ」

石上は笑いながらビールを一息で飲み干した。

第四章

石上刑事と別れて事務所に戻ると、久ちゃんが青い顔して息を切らしてやって来た。

「英ちゃん！ いる？」

「なんだよ、そんな大声出して」

「今、うちの店に男が来て、すみれを出せって怒鳴ってるの。慌て裏口から来た」

「よし」

佐木田はジャンパーを手にとると、階段を駆け下りて久ちゃんの勤め先に走った。

フラワーガーデンという店は三百メートルほど先にある。少し安い感じのするテナントビルの二階で四人の女の子が働いている。雇われママは気風のいい五〇代。

若い男が二人でママを脅している。

佐木田が二人の前に立つと、上から下まで値踏みするかのように見る。

「おい、この間に入ってくるとはいい度胸じゃないか」

「ああ、僕はこの店の用心棒なんだよ」

「何だと、こんな痩せた用心棒がいたのか」

後ろから入って来た久ちゃんが怒鳴る。

「何言ってるのよ、この人は片っ端から投げ飛ばすほど強いだよ」

佐木田は思わず苦笑いしながら男たちに近づいた。

「あのね、どこの誰かさんは知らないけど、僕は佐木田英輔って言って逃げも隠れもしないよ」

すると、入口から藤原組の遠藤が入って来た。

「おや、にぎやかな店がどうしたんだい。静かじゃないか」

ビビったのか、若い男は若頭の遠藤を知っているようだ。

「あ、遠藤さん。どうも」

「どうしたんだ、お前たちはどこの組のもんだ」

「あ、いや、組ではありません」

「あ、なんたらコーポレーションの社員じゃないのか。その小指貰うことになるかもよ」

慌てる男たち。すぐむことも忘れて逃げて行つた。

佐木田はどうもすみませんと遠藤に頭を下げた。

遠藤は隣の店のマージャン店で遊んでいたところ、佐木田や久ちやんが血相変えて入るのを入口から見たという。

「佐木田さんの腕に任せておいた方がいいかと思つたけどね」

「いやいや、どうも。用心棒なんて口から出まかせ言つたものだから、ぞつとしていたんです」

久ちやんもため息をつきながら、ママの方にもたれた。

「本当に殴られたらどうしようかって心配だつたわ」

「よく言うよ。俺が殴られそうになることばかり言うから。久ちやん困るよ。それにしても花絵さんをどうするつもりなんだろう」

遠藤は佐木田の方を向いて花絵さんはどこにいるんだと尋ねた。

大阪へ行く話を聞いているが、店の者は誰も知らなかった。久ちやんでさえも聞いていないという。

佐木田は遠藤に一杯奢ると、久ちやんに花絵の住所を教えてもらった。

花絵が住んでいるのは飯田橋だった。

翌日、佐木田は飯田橋に向かった。

地下鉄の駅から十分ほど歩いてコンビニの角を曲がると、単身用マンションがある。その四階に住んでいるということだった。古いマンションは四階なのにエレベーターがない。階段を歩いて行くしかないのだ。昨日の遠藤と飲んだ酒が体を重くしていた。

矢野と小さく書かれたプラスチックのプレートが貼つてある。

呼び鈴を押す。いないはずだから押しても無駄とも思つたが、意外なことにドアが開いた。

中から出てきたのは若い女だった。

「誰？」

「あ、佐木田英輔と言います。矢野さんのお宅ですよ。」

「ええ、今いません」

すぐにドアを閉めようとする。靴のつま先を入れた佐木田。ドアが閉まらないことに恐怖の表情を見せる女。

「ねえ、警察を呼びますよ」

「その方がいいと思うよ。君、怖がってるから。僕は花絵さんから弟のことを調べてって頼まれたんだよ。ひょっとして、君はさおりさん？」

大きな目をますます大きくしてじつと佐木田を見つめる女。

やがて、ドアを開いて佐木田を中に入れた。

その部屋は綺麗に整頓されていて、女の一人暮らしらしく花も飾ってあった。

佐木田は自分が便利屋家業の事務所を開いていて、矢野花絵に頼まれた話をした。女はやはりさおりといい、ソープで働いていたと話した。正勝はどこにいるのかと尋ねたが、首を振って知らないと答えた。

「花絵さんは大阪なんだろう」

「ええ、まーちゃんが大阪で捕まったっていうから出かけて行った」

「そんな警察の話は聞いてないけどなあ」

「捕まったのは警察じゃない」

そう言うときさおりは静かに立ち上がって、ファンシーケースを開けた。花絵の衣装がぶら下がってるが一番奥に一枚の上着が見えた。男物だ。

さおりはそれを取り出すと佐木田に見せた。

「見て」

差し出した服は少し硝煙の匂いがした。作業着のようでよく見ると、左の胸ポケットに穴が開いている。撃たれたのか。だが血が噴き出た様子もない。ただ、少しだけ裾に血がついていた。

「この服は正勝のか？」

頷くさおり。

「二人でいた大久保のアパートの入口にこれがノブにぶらさがっていて。まーちゃんが教えてくれていたお姉さんの所へ昨日来たの」

「正勝はどうした」

「それが待つても連絡が来なくて。そしたらお姉さんのケータイに大阪へ来いって。まーちゃんを預かってるから一人で来いって」

「誰からの電話だ」

激しく首を振るさおり。顔色が悪く血管が浮き出るような白い肌だ。

「君は何か食べているか」

「何も食べたくない」

佐木田は立ち上がると、冷蔵庫の中を覗いた。卵と醤油と花ガツオがある。炊飯器は昨日からそのままのようだ。釜に茶碗一杯程のご飯が残っていた。手際良く卵雑炊を作ると、さおりに差し出した。

「美味しそう」

「ああ、うまいよ。食べてごらん」

さおりはずっと雑炊をすすると、笑顔になった。

「子どもができてるんだろ」

さおりの箸が止まった。

第五章

さおりはお腹をかばうようにして、佐木田を見つめた。

「今、どれぐらいなんだい」

「三カ月、悪阻がひどくて」

「まあ、ゆっくり食べて。何か食べないとお腹の子に障るよ」

「うん」

さおりは顔を上げて呟くように言った。

「まーちゃんは優しいから、こんな仕事をしている私にも普通の女の子として扱ってくれたの。仕事で知り合ったのに足を洗えって」
好きになったらそんなものだろう。正勝も若い男なんだから。

「でも、そんなことどうして分かったの。まだ、お腹も出てないのに」

「いや、その机の上の薬」

机の上に産婦人科の薬があつた。

「ああ、なんだ。すごいって思ったのに」

「具合が悪いのか」

「あんまり食べられないし、悪阻がひどいから下腹が張って来ちゃつて。流産しそうになつて」

「ふーん、そうか。大事にしろよ」

「うん」

佐木田の言葉に笑顔で応えるさおり。

正勝の服を石上刑事に渡す事に決めた。自分だけでは手に負えない事件になりそうだと佐木田は考えた。一体どこへ行ったのか。この二人はどこにいたんだ。

拳銃の痕も出てきた以上、この血痕が正勝のものなら命を狙われることになっているようだ。

「焼身自殺なんてしてないんだな」

黙っているさおり。

「なんでそんなことを計画したんだ。誰の差し金だ」

さおりは窓のほうに顔を向けている。作った雑炊が冷めてしまっ
そうだ。

「まずは食べなよ」

「うん」

さおりは箸を進める。

女は強い。まだ、若いのに母親になったという意識からか、細い
体に何とかして育てようという意志が感じられる。さおりは食べ終
わるとほっと大きく息をした。

「花絵さんは一人で行ったのか」

「ううん」

首を振るさおり。大阪へ行くことを促す電話がかかって来たのだ。
そして、このマンションの下にタクシーが止まっていたという。中
には誰かいるようで花絵は後部座席の人と話をしてから乗ったとい
う。

「ここに君がいることは」

「誰も知らないはず。タクシーが来た時もお姉さんはすぐに下りて
行ったから」

さおりは疲れているようなので、佐木田は寝るように言うと、石
上という刑事以外は誰が来ても開けてはいけないと言った。

「警察に話したら、私たち捕まっちゃうの」

「今はとにかくゆっくり休め」

佐木田は正勝の服を手にとると、部屋を後にした。さおりが部屋
のかぎを閉める音を聞くと足早に階段を下りた。

マンションを出ると、佐木田は石上に連絡した。

午前十一時ごろ、喫茶店梓には久しぶりに藤原組長がやってきた。
「あら、もういいの？」

ママが声を掛けた。組長は少し色が白くなっていて、どう見ても
静かな技術者のような雰囲気だ。とても組長には見えない。

「ええ、お久しぶり。ここのコーヒーが飲みたくてねえ」

「嬉しいこと言ってくれるじゃない」

えりちゃんが水を入れて差し出す。

「お待ちしました」

「おお、えりちゃん。もう、仕事は終わりかい」

「ええ、今から学校です。ごゆっくり」

バイト時間は午前中だけ。えりちゃんは大学の授業があるらしく、

今日は荷物がいっぱいだった。

「何をそんなに持って行くんだい」

「今日はパソコンがいるの」

「そうか、大変だな」

「今度パソコンについて教えてください」

それには答えず、いつておいでと組長は優しく言った。えりちゃんがでていくと、入れ違いに久ちちゃんがやって来た。

「あら、珍しい。どうしたの」

「英ちゃんはまだ来てないの」

「ええ、今日はまだよ」

そう言う久ちちゃんはメモをママに渡した。そこにはケータイ番号が書いてある。

「ここに電話するように言うのね」

「ええ、さつき花絵さんから新しい番号だって、でもすぐ電話が切れて。話し中なのになんか嫌な予感がして」

「久ちちゃんが電話したらいいのに。佐木田さんに」

「それがケータイ落としちゃって」

久ちちゃんは防水になってないケータイをトイレに落としたと言って、佐木田の電話番号がわからないと困っていた。

ママは自分のケータイを渡すと、佐木田の番号を見せた。

「ほら、これから掛けたらいいわ。急いだ方がいいから」

久ちちゃんはあるがとうと言うと佐木田に連絡した。

「あ、英ちゃん、私。あのね……」

久ちゃんの話し方はやはり女の匂いがした。梓ママは二人が仲が
いいのは知っていたが、いざ、その電話の口のきき方に少しの嫉妬
を感じた。

そして、今日のモーニングは決して取っておいてやらないと心に
決めた。

残っていたパンを藤原組長に「おまけよ」と言って差し出した。

第六章

ここは大阪南港。

たくさんの倉庫群の一角に、野沢コーポレーションの倉庫があった。

夜の倉庫周辺は速さに浮かれた若者たちが走り回る。その中に高^た田^{かた}雷^{らい}太^{たい}がいた。この男は高校生だったが、父親の借金による蒸発から母と姉と三人が残された。高校へ行く金は無くなり、姉は大学を辞めて夜の接客業についた。母親はビルの清掃業の口を見つけてきたが、慣れない仕事に病気になり寝たり起きたりの日々だ。

雷太は初めこそ真面目に定時制に通うと決めていたが、昼間の仕事の疲れや鬱憤からついに暴走族の友だちができた。オートバイは無いから乗せてもらうばかりだったが、ついに盗むことを覚えてしまった。それらは解体している部品は売り飛ばし、自分のバイクとして改造していった。

初めは五十CCだったバイクも、欲望が次から次へと浮かんで、いつの間にか二百五十を乗るようになっていた。ただし、それらは盗品をさばく輩から売り買いするという悪の連鎖みたいなものだ。

ただの野次馬から今では盗品を扱う暴力団の下っ端となって働いているのだった。

夜の帳が下りるとぞろぞろ集まって走り回る。

「雷太、いい加減にしなさい。あんたも働いてここの家賃ぐらい入れてよ」

「うっせえな、俺は好きなように生きるんだよ」

「じゃ、ここから出ていきなよ。あんたを食べさせる理由はないよ」
「毎日毎日小言ばかり言っな」

姉の五月はイライラしていた。自分ばかりが酔った男に体を触られながら飲めない酒を飲んでいるのに、この弟はそんな私に寄生しているのだと。昔はあんなに可愛かったのに、今ではどこで何をし

ているのか。あのバイクは盗品ではないのだろうか。

問い詰めてもへらへらするか、無視するか、弟はのりくらりとかわすだけだ。この雰囲気はいつも飲みに来るやくざの男たちと似ている。

仲間も眉を抜いてる奴や、金髪で刺青をしているような、まともとは思えない野郎ばかりだ。最近ではこの五月にちよっかいを出す男もいる。

五月は背も高くスタイルがよく、ロングヘアが適度にカールしていて、雷太の自慢の姉貴だった。頭もよく文芸部の部長だったことからいろいろな高校の作品コンクールには名前を連ねる常勝者だった。大学も関西では名の通った私立に行ってたが、父親の会社が倒産したことで全てが台無しになった。母親はお嬢さんで育ったため、今まで勤めた経験もなく体も丈夫でなかった。強く生きると口では言ってもそうできずにいた。ついにはストレスからかつ病になったのだ。

「おい、雷太ー」

外から呼ぶ仲間。

「近所にみつともないから大声を出さないように言いなさいよ」
母親が寢床から言う。

五月は着替えて働きに行く準備をする。短い丈に思い切り胸の開いた赤いワンピース。赤いピンヒール。見事に着こなす。真っ赤な口紅を差すとエナメルバッグを肩から下げてドアを開けた。

「いよっ、五月ちゃん。いいねえ」

口笛が響く中を睨みつけながら歩く五月。

その中でもひと際五月に熱い視線を送る男がいた。雷太に盗品の受け渡しを教えた平井新太郎だ。

五月の後姿を見送ると、雷太にこう言った。

「おい、雷太。この間のマフラーの金、もういいよ」

「えっ、くれるんですか」

「ああ、その代わり、一度姉貴とデートさせろや」

雷太の顔が青ざめていく。

この男がデートだけで終わるわけがないことを知っていた。以前、公園でデートしていた男女を見つけたとき、新太郎は男をいきなり殴り飛ばして、女を奪った。雷太は気を失った男から財布を抜き取り、新太郎の後を追った。

雷太は新太郎が見張っていると野沢コーポレーションの倉庫の前に立たされた。

中から聞こえる女の泣き声ときどき叩く平手の音。うめくような声。

三十分ほど経つと、新太郎は出てきて雷太にもやれと言った。倉庫の中には衣服を破られ放心状態の女。目には青いあざ。乳房には齒型があつた。下半身を手で隠すことも忘れるほど、女は汚されていた。血で汚れているショーツを渡すと、女はうつろな目で呟いた。

「一生忘れない。殺してやる」
それを聞くと、雷太は殺される前にこうしてやる、と狂気にも似た意識が生まれ女を倒した。

獣のように抱いて事を済ませると、女を置き去りにして二人は出て行った。翌日の新聞に何か出るかと思つたが一切出なかった。縛り上げた男のことも書かれてはいなかった。

女がどうなったのか、その後のことは一週間もしないうちに忘れてしまった。

そんな新太郎が五月に興味があるということは、あの光景が頭に浮かんでくる。

「新太郎さん、それはちよつと。姉貴も仕事あるし」

「何だよ、じゃ、マフラーの金二十万、明日までに届けろよ」

「そんな、あれは五万つて話じゃ……」

「できねえよ、割り引くなんて。俺だって仕事なんだから」

新太郎の目が怪しく光る。

雷太は分かっていたはずだ。いつか、こんな仲間とつるんでいた

ら碌な事にはならないと。

だが、そんな雷太を楽しむように新太郎は言った。

「いいよ。五月ちゃんのデートは映画だけだからさ」

「ホントに映画だけですよ」

「ああ、仕方ねえな、弟分の姉貴なんだから」

雷太はホッとした顔を見せたが、新太郎は舌なめずりをしていた。

第七章

寺田祥子は中野のマンションにいた。
てらだしようし

「いつまでもこんな関係続くわけないわ」

一時のきまぐれで付き合った中田宏。
なかたひろし

居酒屋を経営している。

ふと、立ち寄ったジャズバーでばったり会った高校の同級生。

今は金持ちの綺麗な女。祥子は気が強く昔からはつきりと物を言うタイプの女だった。そこが魅力的で昔から男たちにモテていた。

今は宝石店の奥様になっているようだが、家庭生活が面白くないのかジャズバーで一人で酒を飲んでいた。

「お、祥子じゃないか」

「えっ、中田君じゃない」

久しぶりにクラスメートに会った懐かしさから話が弾んだ。

楽しくてつい誘ったが、祥子は積極的な女だった。シャワーを浴びていると中田の後ろから抱いて来る。

「おい、洗えないじゃないか」

「私がしてあげる」

祥子は石鹸をつけると中田の体に自分を押しつけてきた。

中田は結婚したことがあったが、何となくうまくいかなくなって三年前に離婚した。二人が忙しかったからなのか、一緒にいることがほとんどなく、お互いがセックスにも興味をしめさなくなり自然消滅のような離婚だった。

だが、この祥子はどうだ。

夫がいるというのに、一人で酒を飲みしかもあつけらんとしたセックスをする。その何とも言えない魅力に中田は惹かれた。気楽な不倫だと思っていた。それはお互いがわかっていたはずだ。

だが、それがずれたのはある男に見られたことだった。

矢野正勝だった。

正勝は車の当たり屋詐欺にあったようだった。店じまいをして帰る前に中田に話しかけてきた。

「店長、金を貸してください」

「もう、いい加減にしるよ、給料前借しただろう」

「これで最後ですから」

「ムリだよ」

突っぱねたら正勝は思いがけないことを言った。

「分かりました。店長が付き合っている人、寺田宝石店の奥さんですよね」

中田はぎょつとした。

「お前、何をするつもりだ」

「いや、何でもないですけど。寺田宝石店の主人が知ったらただでは済まないんじゃないですか」

恐怖だった。中田は一瞬ひるんだ目をしたのだろう。

正勝は続けてこう言った。

「あと少しでも用立ててください」

正勝の眼は必死だった。どうも外に誰かいるのだろうか、時々入口の方を見る。

「これで終わりだ。明日からもう来るな」

そう言って握らせたのは二十万だ。

「ありがとうございます」

正勝はそう言つと、入口を出て誰かと話しているようだった。中田は不安だった。

いつ、また同じことを言つてこの男が来るのではないかと。前掛けの紐を強く握りしめた。

居酒屋の明かりを消すと、祥子にメールをした。

「今すぐ会いたい」

この日の中田は変わっていた。

祥子は中田の眼が光っているのを認めると、少し微笑んだ。

「今日は獣の眼になってるのね」

すると、その言葉を言い終わらないうちに、中田は祥子の服をはぎ取った。

祥子の肩に齒を立てた。

荒くすればするほど、祥子は興味津々というそぶりを見せた。

舌なめずりをする祥子の顔は、まるで妖しい生き物のようだった。夜の闇の中でうごめく二人。

息。

きしめくベッド。

粘着質の音。

うめき声。

時間は止まらない。

中田はその時思った。

地獄に落ちていく。

祥子は地獄の案内人か。

そう思いながらも体を離せない。

この手、この口、この秘部を知ったからには、もう二度と抜けられない。

そう思うと強く乳首を噛んだ。

悲鳴をあげながらも、祥子は止めてとは言わなかった。
「これを飲んで」

そう告げると、祥子は薬を二錠中田に口移しで渡した。
何分も経たないうちに、中田はよみがえってきた。

果てたはずの体に英気が漲る。

遠のく意識の中で、祥子が覆いかぶさって来る。
感じたことのない感覚。

全てが黒白の色の無い世界。

祥子の吐息が心地よく天国にいざなうようだ。

中田は呟いた。

「俺たちは落ちていく。地獄の底に」

祥子はよく分からないことを呟いている。

「あなたのものは私のもの。私の体は……」

朝になっても祥子は帰らなかった。

中田も起きられなかった。

「一体、あの薬はなんだよ」

「元気になる薬。一度試してみたかったの」

「ヤバいんじゃないか。麻薬じゃないのか」

「いいじゃない、一度くらいじゃ中毒にもならないわ」

祥子の言葉にそうだろうかと不安な気持ちを隠せなかったが、あの感覚を忘れることはできそうもなかった。

「ねえ、もう一回分残ってる」

そう言つと祥子は、ベッドから起きあがりバッグから薬を取り出した。

「もうやめておこ」

と言つ言葉は祥子の唇に塞がれた。

第八章

中田はマンションから祥子が出ていくのを見送った。居酒屋を始めてからは止めていた煙草に火をつけた。祥子が置いていったものだ。

何だかふらふらする。

やり過ぎると世界が黄色になるって誰かが言ってたな。そんなことはないんだ。

ふと、可笑しくなった。笑うと煙が気管に入ってむせてしまう。久しぶりの煙草は美味しかった。

料理の味に響くと、今まで止めていた煙草。

「ただの居酒屋にそんなもの客は望んでないかもな」
何もかも鬱陶しい。

思い出すだけでも腹が立つ。あのときの正勝。誰が勤め先を世話してやったんだよ。

くそつ、人を脅すような真似をしゃがって。

中田は面白くなかった。

使ったティッシュが汚らしく散乱している部屋。

あいつがいると碌なことはない。

「誰かが殺してくれるといいのに」
ふと呟いて、自分でも驚いた。

慌てて煙草の火を消す。

人を殺すなんてこと、想像したこともなかった。

だが、二日続けて飲んだ薬のせいなのか、妙に自分が大きく見える。

才能が埋もれているように感じる。

社会はもつと俺を受け入れるべきだ。

不遜な考えが頭を占めていく。

小さな居酒屋で終わるような俺ではない。

大学のバイトが本業になっちまった。

あつという間に店長になり、大学は中退した。

学生相手やサラリーマン相手の店のノウハウを研究した。

どんなものを安く仕入れ、何が喜ばれるか。

だが、こここのところの不況で人は家路に着くようになった。

昔のように上司といやいや飲みに行くこともしないのか。

上司も部下も金もないのか。

そんな中、正勝は俺の車で仕入れに向かった。いつものように高い葉物野菜を少し遠いが埼玉で安く売ってくれる店を見つけた。

その帰り、野沢良太にぶつけたらしい。

信号のない交差点で二十キロ程度しか出していなかった。左折しようとしたときに走って渡ろうとしたのか良太が飛び出してきたのだ。

良太はボンネットにドンと乗ったという。

驚いた正勝は救急車を呼ぼうとしたが、そのとき良太は父を呼んでくれとケータイを渡した。

馴染の医師に運んでほしいと言われた。それから正勝の悪夢の始まりだった。

怪我のお陰で仕事ができないと言われ、金の請求が始まった。

初めは仕入れで頼んだという思いもあったが、店に変な男も来るようになった。

貸した金もきつと返っては来ないだろう。

膝を思い切り強く叩くと、中田は立ち上がった。

祥子は家に戻っていた。

「昨日はどうしたんだ」

「ほら、同窓会で会った友だちが離婚の危機なんだって。泣いて訴

えるからついつい聞いてあげていて」

「そんなときでも電話くらいできるだろう」

「メールしたわ」

そう言われ、ケータイを見ると確かにメールがあった。

怒りの矛先を持って行く場もなく、寺田は朝食を作ろうと立ち上がった。

「ねえ、私が淹れてあげるわ。コーヒー」

祥子はニコツと笑うと寺田の肩に手を置いて、エプロンをつけた。白のフリルのエプロンは祥子がつけると、妙に色っぽくなるのはなぜだろうか。清楚な雰囲気の代表みたいな白のエプロンなのに。卑猥なイメージが湧いてくる。

いい歳をした男がみつともなく嫉妬する。

本当はどこで誰と何をしていたんだ。

問い詰めたくなるような思いをぐつと堪えていた。

だが、祥子はそんな寺田をなだめるかのようにウエッジウッドのカップにブルーマウンテンのコーヒーをいれて差し出した。

「いい香りね」

「ああ」

カップを持つ寺田の人差し指を祥子が触れる。

「あなたの指は長くて素敵」

からめてくる指を払いのけることは到底できることではない。怒っていたのにもうそんなことはどうでもよくなってしまう祥子の指「ねえ、お母さんのところへ何を持って行ったら喜ぶかしら」

冷たいようだが、祥子はよく考えてくれているんだ。寺田は祥子を抱きしめた。

「今は梨が出てきたから持って行ってよ」

「そうするわ」

祥子は笑いながらこう言った。

「あら、もうこんな時間よ。店を開けるんでしょ」

寺田は盛り上がった気持ちのやり場のなさにかっかりしたが、祥

子は「夜のお楽しみ」と耳元で囁いた。

「今度入荷したあのネックレス素敵ね」

「ああ、でもこの前買ってあげたばかりだからな」

「うーん、意地悪」

祥子はふくれっ面をして見せる。

祥子は確信していた。

きつと、今晚、あのペンダントを裸の私につけるはずだと。

寺田は店のシャッターを開けると、ダイヤのペンダントをショーケースから取り出した。

祥子の喜ぶ顔が見えるようだった。

そして、隣の薬局で値段の高いマムシドリンクを買ってきた。

「あ、社長早いですね」

「うん、このペンダント。僕が買うよ」

「あら、また奥様ですか。羨ましいわ。そんなに愛されて」

店員はお世辞を言ってるだけだが、寺田は上機嫌に笑った。

第九章

久ちゃんから電話をもらった佐木田。

「嫌な予感がするのよ」

「いつのことなんだ」

「さつきよ。私に新しい番号を教えてくれて。それで、店にもあなたを探しに人が来たって話していると突然切れて」

「おかしいな」

佐木田はさおりのことについても聞きたかった。

どの程度の知り合いなのか。弟の彼女を匿ったのはなぜだろうとか、聞きたいことが山ほどあった。弟の居場所もホントは知っているのではないか。

「英ちゃん、今晚来る？」

「うーん、これから大阪へ行く予定だ」

「花絵さんの居場所知ってるの？」

「いや、何も知らない」

「私も行く」

「は？ 遊びじゃないんだよ。それに変な奴らも絡んでるんだ」

「私、以前花絵さんに働いていた店聞いたもん」

「どこだよ」

「だから、今から駅へ行くから待ってて」

妙に嬉しそうな声で話す久ちゃんは電話を切った。

佐木田はブツブツと怒っていた。

「何だよ、旅行じゃないって言ってんだろ。二人で行く意味なんかないのに」

それでも、大阪に行かないと花絵と正勝のことが心配だ。

佐木田は石上刑事に電話をした。さおりについて心配だから見てほしいということと、もう一つ聞きたいことがあった。

「石上だ」

「佐木田です」

「ああ、どうしたんだい」

「花絵さんの家にさおりが来て、正勝の上着を持ってきてるんだけど、銃で撃たれた穴があいてるんだ」

「うん？ 銃創？ わかった。住所は」

伝えると佐木田はさらにこう言った。

「寺田宝石店の様子さんがいなくなったんだけど、何か話を聞いてませんか」

「梓の近くの宝石店か？」

「そうです。旦那に奥さんを探すように頼まれてるんだけど」

「浮気か？ それとも金か？」

「そこですけど、ちょっと何か掴んでたら教えてもらえないかなと」
「おいおい、こっちが便利屋じゃないんだから」

石上はそう言うが、決して怒ってはいないと分かる。このことを伝えておけば、きっと何かアンテナを広げてくれるに違いない。

「じゃ、お願いします。今日は梓に行きませんから」

「どこへ行くの」

「大阪へ、久ちゃんまで行くって」

「おお、それはそれは羨ましい。しつぽりと大阪の街へ」

「違いますよ、そんなのじゃないんです。花絵さんが以前働いていた店を知ってるのか」

石上はニヤニヤしているようで話を碌に聞かずに電話を切った。

「違うのになあ」

そう言いながらも佐木田は久ちゃんとしばらくデートしていないなと思った。

久ちゃんはぽっちゃりしてるけど、なかなかのナイスボディだ。

佐木田は駅に行く前に栄養ドリンクを一本飲んだ。

「うまい！」

心なしか足が弾んでる。

「俺もまだ若いな」

だが、そんな佐木田の前を寺田宝石店の店員が歩いていた。

あのときの手袋をはめていた人か。先日店に行った時のことを思い出した。

彼女はなかなか綺麗で、祥子よりこつちがいいのにと佐木田は勝手に思った。

彼女は栗色のボブにっていて、二重の目がチャームポイントだと自分でも自覚しているような化粧をしていた。

彼女はふと後ろを何回か見るので、尾行されてないか警戒しているように見えた。

声を掛けるつもりだった佐木田は、少し興味を感じて彼女の後を追った。佐木田のことなど覚えてはいないだろう。

彼女の手には白い小さな紙袋と青いオーストリッチのバッグを提げていた。

若いのにあのオーストリッチを持っているということは、あの店の給料はかなりいいということか。

それとも、あの寺田と愛人関係なのか、そうは見えなかったが。

佐木田は彼女が銀座線に乗ると、隣の入り口から乗った。彼女はすぐに座った。佐木田は新聞を広げて、彼女の様子を見ていた。白い紙袋には寺田宝石店の文字があった。客に頼まれたのか、高い届け物かもしれない。少しがっかりして次の駅で下りようと思った。すると、彼女は決心したかのようにその紙袋を持って隣の車両に向かった。

大きく息をした彼女の様子が奇異に見えた。

佐木田はそつと後をつけた。

彼女は隣の車両の入り口付近に立っている男に渡した。胸ポケットに白いハンカチが見えた。あれは合図なのか。今時白いハンカチを胸に入れてる男など電車で見たことはない。

佐木田は持っていたケータイで写真を撮った。

祥子の失踪にどこか接点があるかもしれないのだから。

佐木田は彼女を追うのを止めて、東京駅に向かった。

大阪へ行くことを忘れるところだった。

ホームでは久ちゃんが小さなボストンバッグを持って立っている。

「おいおい、本当に旅行気分かよ」

「遅いわよ、英ちゃん」

「だって、大阪久しぶりなんだもん」

「こっちはお仕事なの」

「いいじゃないの。旅行なんて初めてよ」

「だから、旅行じゃないって」

「意地悪」

思い切り腕をつねられた。

「いたたた」

そう言えば、これだけ仲が良くても旅行はしたことがなかった二人。

久ちゃんの手には駅弁があつた。

「まあ、いいか」

久ちゃんは嬉しそうに腕を組んで一緒に乗った。佐木田は栄養ドリンクを飲んだことを思い出した。

「大阪の夜は暑いぞ」

佐木田の言葉をまるで疑わずに久ちゃんはいやだわと呟いた。

「私、ベビーパウダー忘れた」

「なんだよ、それ」

「アセモがすぐできるの」

佐木田はこの女のこんなところがいいなと思っていた。

第十章

佐木田は久ちゃんと新幹線に乗っていた。

駅弁を食べてビールを飲んで、佐木田は仕事を忘れてしまいそうだった。

「英ちゃん、ビール、もう一本飲もうか」

「おいおい、大阪へ着くまでに出来上がったよ」

「いいじゃない、もう一本くらい」

「そうだな、じゃ、もう一本だけ」

駅弁の卵焼きを頬張りながら微笑む久ちゃんは可愛い。

鶏の照り焼きもうまい。

こんな二人の旅行なんて無いと思っていた。

佐木田は外の景色を眺めながら、花絵と正勝の二人が消えたことを考えていた。

弟思いの姉に、早くいい結果を報告してやりたいが、物事はそう簡単には進まない。

久ちゃんは買った週刊誌を読みながら、しきりと話しかけてくる。
「ねえ、英ちゃん、ほら、この二人噂通りよ。ホテルに消えたんだって」

「そりゃ、若いんだもん。行くだろう」

素っ気ない返事しか出てこない。

「ほらほら、この人、この頃見ないと思っていたらラーメン店開いたんだって」

「ふーん、芸能界よりそっちが売れると思うよ」

「私、結構この人好きだったのよ。いい男だし」

「そうか、足が短いぞ、この男」

「あら、英ちゃん妬いてるの」

「ふん、あり得ないね」

久ちゃんは拗ねて見せる。

まるで恋女房にでもなつたみたいだな。

佐木田は自分でもそんな錯覚に陥りそうな気がした。

結婚なんてするつもりはない。ああ、絶対にな。久ちゃんがどうのこつのではない。

久ちゃんは占いを見ている。

「私射手座なの」

「ふーん、腹までは人間で腰からは馬か。だから嫌らしいんだな」

「もう、意地悪ね！」

そう言うが怒ってはいない。

「英ちゃんは何座？」

「俺は車座」

「もう、そんな親父ギャグ言ってないで」

「俺はやぎ座だよ」

すると、久ちゃんは相性があんまりよくないと呟いている。

「そうだろ？ そんな気がした」

「ホント？ 相性悪いの？」

「ああ、よくないな」

「え？ ホント？ よくない？」

久ちゃんは心配そうに見つめる。

「ああ、だから今夜は眠れない」

そう言つて笑つと、久ちゃんはホツとしたように笑つてこつ言つた。

「今日は大阪のすつぽん料理食べよう」

そんな暇あるのかなのか、佐木田は少し眠ることにした。

いつの間にか久ちゃんの寝息が聞こえて目が覚めた。

「おい、もう新大阪に十分で着くぞ」

「え、もうなの」

久ちゃんは大きく伸びをした。佐木田は新大阪の夜のネオンに花絵も正勝もここにいいのかとふと思った。

久ちゃんは梅田の店だったと言いながら佐木田と並んで歩く。

佐木田はケータイを取り出してビジネスホテルを予約した。
シングルしかない。

「今日はツインはいっぱいだ」

「えーっ、そんな。一人は嫌だわ。ここにしよう」

目の前の大きなホテルを指さした。

「おい、そこは高いよ」

「いいの、英ちゃん、私旅行なんだからここに決めた。英ちゃんも泊まって」

「俺のカードじゃ足が出ちやいそうだよ」

「いいのよ、私が払うんだから」

「ちっ、カッコ悪いなあ」

「私がどうしても行くて決めたんだから、私が払って当たり前よ」
久ちゃんはフロントへ行くとさっさとツインを頼んだ。なんと、
一人が一万八千五百円。

絶対に佐木田は泊まらない金額だ。

ボーイが二人の荷物を持って歩く。

ターコイズブルーの張り替えたばかりの匂いがする絨毯をあるく。
十四階だった。

久ちゃんはカーテンを開けてネオンを見つめた。

「花絵さん、ここにいるのよね。ここからだと近いわ」

「どっちだい」

久ちゃんの肩を抱きながらそう言つと、とろけるような声で佐木
田の耳元へ囁いた。

「一息入れてから行かない？」

久しぶりの彼女の唇は柔らかく、佐木田の舌が迫っていても動
じない。

ファスナーを下ろすと、黒いスリップに黒いブラ、そして、タン
ガだった。

「おう、これはすごいなあ」

肩ひもをずらすと、簡単にスリップが落ちた。ぽっちゃりしてい

ても久ちゃんの体は男の掌には優しく吸いついてくるようだ。ブラもタンガも脱がす暇なく佐木田の舌が追う。

待ちかねているかのように佐木田の服を脱がそうと手を伸ばすが、触らせないように佐木田は手を押さえ、彼女の体に舌だけで応えていく。

「ああん、もういや」

「そうかい」

「意地悪なん、だ…から……」

体をうねらせる久ちゃんの熱い吐息。

服を脱いで立ち上がると、久ちゃんが傳く。二人の時間が緩やかに進む。

波がうねるように体が動く。

これほど女の体に溺れそうになるのは久しぶりのことだった。

「英ちゃん」

彼女の声が甘く、佐木田の耳を軽く噛みながら喘ぐ。

どれほどの時間が経ったのだろうか。

佐木田は時計を見た。

「店が開いてるな」

「うん、行こうか」

「現金な女だな」

「帰ってから、またね」

「いや、もう仕事に没頭する！」

「またまた」

そんな甘ったるい時間を振り払うようにシャワーを浴びて着替えた。

久ちゃんは、しっかり化粧をして新しいワンピースに着替えた。大阪のクラブに負けたくないっていうのか。

女とは分らないものだなと、佐木田は久ちゃんの耳に囁いた。

くすつと笑いながら「そうよ」と応える彼女は、夜のホステスの顔だった。

第十一章

寺田はあの日、朝から怒っていた。

母親がネコのミーコがいないと電話してきた。

「佐木田さんに頼んでちょうだい。ミーコがいらないの」

「わかった。連絡するから。今僕は忙しいんだから」

「そんなこと言っただけで。車にでも轢かれたらどうしよう」

「大丈夫だって。母さん。佐木田さんにすぐ電話するから」

「私、佐木田さんの連絡先を書いた紙失くしちゃったの。それでね」

「じゃ、切るから」

母親はまだ何か言いたそうだったが、寺田はそれどころではないと思っていた。妻が昨日から帰ってこないのだった。

以前一泊した時は昔の同僚と飲んだということで、その女の人からも電話を貰った。だが、それだって本当の同僚かどうかは分からない。調べたこともない。そういうことを調べるということ自体男として失格だと思っていた。

母親よりも妻を取る男がそこにこだわるのもおかしい話だと思いが。

寺田は何か手掛かりになるものはないかと妻のクローゼットや鏡台を探してみた。これといっておかしなものはない。ただ、通販の段ボールが中味も出さずにそのまま積みまれている。買うのが楽しくて、使うということは目標ではないようだ。

金を使い過ぎるのも困るが、祥子は実に魅力的な女だから少々なことは目をつむるしかない。彼女と知り合ったのは結婚紹介所だ。

寺田はひと目で気に入ったのだが、彼女の方はたくさんの男が候補にあがったようだ。だが、自分を選んでくれたことで、寺田はすぐに結婚を申し込んだ。

派手な顔立ちの祥子は宝石がよく似合った。寺田は商売柄どういふ女性がどういふアクセサリを好むかよく知っていた。祥子はボ

リユームのある髪に肉感的な雰囲気から大きな石のアクセサリーがよく似合った。だが、祥子自身はそんなことより人が持つてないものを欲しがった。親戚も誰もいない結婚式だった。彼女は両親も兄弟もいないと言った。寺田の母親は息子がよければと周囲の心配も気にしなかった。

それなのに。祥子は母親を一方的に嫌った。母親は少しボケてはいるが、まだそれほど手のかかることは何もなかった。新婚の間は離れて暮らそうという息子の申し出にも寂しそうではあったが了解していた。

だが、母親は一人ぼっちになったからか、最近は何をやらなかったか、母親は一人ぼっちになったからか、最近は何をやらなかったかわいがるようになった。

佐木田の経営するスリーエス事務所は高いとは思ってたが、自分でネコを探しに行くことなど考えられなかった寺田は、佐木田に頼むしかなかったのだ。

薬の抽斗の下には折り畳んだ紙があった。
息を飲んだ。

それは離婚届だった。

その頃、母親は佐木田が冷蔵庫に貼ってあったメモを見つけた。
「あら、ここに貼っておいてくれたのね。佐木田さんに電話しなくちゃ」

息子に電話したことなどすっかり忘れ、佐木田にネコ探しを依頼した。

佐木田はすぐに探しに行ってくれるに違いない。ホッとして、ベッドに横になるとこの間、嫁の祥子が置いていった箱を取り出した。その菓子箱の中は薬がいっぱい入っていた。

「何の薬かね。家に置いてると叱られるって」

母親は自分の薬とは違う鮮やかな色に見入っていた。

祥子がこれを置いていったのは一週間ほど前のことだった。

「お母さん、病院の貰った美容の薬」

「私は今更美容なんていらないよ」

「違うわよ、お母さん。高いから家に置いてあると彼が怒るの。お母さんのところに置かせて」

「そうかね、それほど高いのかね」

「そうよ、ほらお肌がつやつやでしょう」

母親は以前の方が祥子が綺麗だと思ったが、そのことは言わなかった。ただ、最近の祥子は痩せてきたので、以前よりさらに派手な服を着るようになった。

電話のそばにその箱を置くと、このことは秘密にしてねと笑いなから言った。

いつもはにこりもしない嫁の祥子が、そう言って笑ったのが寺田の母親には嬉しかった。

そして、ケータイに電話がかかると、祥子はなぜかこう言った。

「はい、ルーク薬品です」

「はい、お届けは十錠からです。畏まりました。えーと。公園のトイレの前です」

なんで、ルーク薬品なのかよく分からないが、母親はミーコの方が気になった。

祥子はその菓子箱から薬を取り出すと、また来るからと言って出ていった。

そんなことがあって、一週間。

また、ミーコがいない。

佐木田が捕まえて連れてきてくれた。

「はい、ミーコちゃんはいましたよ」

「ありがとうね、佐木田さん」

佐木田のやさしい笑顔にホッとしながら、祥子の薬や受け答えなどすっかり忘れていた。

第十二章

佐木田と久ちゃんは大阪のクラブ「REX」にいた。

ここのクラブはかなり広く著名人も訪れるという。

店内はゴージャスな造りで入口のカトレアの香りで一瞬戸惑うほどだ。久ちゃんは興味津々でホステスたちの服装や着物をチェックしてる。

「ねえ、英ちゃん、あの子の着物高そうね。二百万はするわ」

「へえ、すごいなあ。あのお姉さんはシャネルだぜ」

「もう、本当に客からどれだけ搾り取るのかしら」

「人聞き悪いこと言うなよ」

男と女の二人が来るのは珍しいことだから、ママと思われる人は目が笑ってはいなかった。嗅覚の鋭い女性に違いない。

「いらつしやいませ」

「あ、どうも」

「初めての方ですね」

「ああ、東京の藤原さんに紹介されて」

さりげなく組長に貰っていた名刺を見せる。ママの表情が安心の色に変わる。流石の藤原さん、大阪でも威力があるらしい。

「さあ、こちらへどうぞ」

案内されたのは奥から二番目のボックス席。

こう言う時に使うのは寺田宝石店からの依頼の金。この際、こういう風に金を使うかはスリーエス事務所の勝手なのだ。

「ビールと何かつまむもの」

「はい、畏まりました」

ママはシャネルのワンピースを着ているチイママと思われるホステスに話をしている。

彼女はにっこり笑いながらビールとチョコのセットを持ってきた。「どうも、よろしくお願いします。蘭です」

「ああ、こちらこそ」

久ちゃんは気取って会釈してる。彼女はそつのない感じで話をする。客あしらいの上手なホステスだ。話し方も上品で嫌味がない。

「まあ、蘭さんもどうぞ」

ビールを出すとボーイにグラスを頂戴と声を掛ける。

「そちらのお綺麗な方は」

「久子です。この人に大阪へ遊びに連れてきてもらったの」

さりげなく佐木田の女という雰囲気を出す久ちゃん。好きにしたらいいよと佐木田は笑ってる。

「あら、いいですねえ」

蘭は本当に羨ましそうに言った。きつと惚れてる男がいるのだろう。久ちゃんが同じ仕事だと理解すると彼女はほぐれて来たように滑らかに話した。

ビールを二本飲むと、ブランデーに変えた。

「ところで、このクラブにすみれて子働いていたでしょう」

久ちゃんが切りだす。蘭は思い出すように少し小首をかしげている。

「ああ、おとなしい感じの子だったあの子かな」

「ええ、多分そうよ」

「弟がいたわね」

「ええ、弟に手を焼いていたから。私は今すみれと同じところで働いているの」

「まあ、そうなの。そう言えば見かけたわよ。昨日」

「どこで」

佐木田は思わず身を乗り出した。でも、その様子に蘭は少し怪しむような目になつた。

「あなた、警察？」

「いや、やくざな探偵」

名刺を取り出して見せる佐木田。蘭は小さな声で話した。

「このオーナーがもう一軒持つてるのよ、お店」

蘭は煙草を吸ってもいいかと聞く。二人で頷く。どうも何かありそうだ。

「その店に入って行くのを見たのよ。でも、あの子がすみれかどうか、はつきりしないけど多分そうだと思うの」

佐木田は三人が話しこむのはまずいと思って、フルーツを頼む。

ママはこっちの席を気にしながらも、次々と注文するので悪い気はしないようだ。

久ちゃんは上手に彼女の話を引き出していく。

「その店ってどこにあるの」

「ミナミよ。マッチ持ってるわ」

そこはエデンという店だった。

「マーちゃんのこと何か聞いている?」

「ああ、弟ね」

「困った子よ。お姉さん子なのに、心配ばかりかけて。男前なのよね」

「会ったことあるの?」

「今はないけど、昔はよく来てたわ」

「この高い店に?」

「ううん、私のマンション」

「えっ?」

聞くとところによると正勝と蘭の弟が同じ中華料理店で働いていたのだという。蘭は弟と一時共に住んでいたので、正勝も遊びに来たようだ。

「あなたの弟さんは今どこに?」

「さあね、全然連絡してこないから。店も知らない間にやめちゃって」

ママが蘭を呼びに来た。蘭の御舅さんが来たらしい。蘭はではまたねと言うと席を立った。彼女の客は太ったどこかの社長のように、座るなり彼女の耳にキスをした。

「いやだあ、社長ったら」

そう言いながら、ボトルを注文させる蘭。

二人で店を後にした。

久ちゃんは会計に目をくるくるさせていたが、佐木田は札を惜しみなく使った。全部で九万だった。寺田宝石店になんて言おうかと領収書を貰った佐木田だった。

「ねえ、英ちゃん。このクラブ行く？」

「ああ、だが、ここは男だけの方がいいな」

「じゃ、私ホテルにいるから」

「送らなくてもいいか？」

「平気よ」

久ちゃんは耳元で待つてるからと囁いた。

「ムリ」

「意地悪。そうね、英ちゃんは若くないもんね」

悪戯っぽく笑うとホテルへ向かって歩いていった。

佐木田はマツチをポケットから取り出した。

黒地に赤い文字。

本当に樂園なのか。

エデン。

第十三章

大阪の野沢コーポレーションの倉庫に、一人の男がいた。

もう、かれこれ四時間ほど経つと思うが、一向にやってこない社長に息子はいら立っていた。

初めは矢野正勝という男はチンピラのような奴だから使えんと言つて笑っていた。

花絵はいい女だ。

良太の周りにはいつも金を目当てに集まるような女ばかりだった。だが、花絵は気立ても良ければ、あんな弟にも優しくするような女だ。良太は知っていた。

大学時代から花絵が大阪で働いていた間も狙っていた。

あの頃の花絵はREXという店にいた。良太は近くのマンションを借りていた。倉庫のバイト代として、親から多額のバイト料をもらつてはいたが、あの店には社長である父がよく利用していたから行くことはできなかった。

父は息子に対しては甘い父親だが、社員に対しては徹底的にノルマを達成するように教育していた。確か営業部門ではノルマを達成できずに自殺した社員もいた。

花絵はその男に惚れていたようで葬儀に行った同僚の社員がそう言っていた。

その後、花絵が店を辞めたと聞いて、大学生の良太はがっかりした。折角野沢コーポレーションの関係で近づくことができると思つたのにそうはいかなかった。

そんな良太が花絵に会えたのは弟正勝のお陰だった。

無事大学を卒業できて父の会社に入社をし、ちよつと酔つて出たときに正勝運転の車にぶつかった。だが、良太は強かだったし、父はそれに輪を掛けていた。

オーバーに痛がる息子と補償を言い続ける父親。正勝は言いなり

だった。

正勝の金が出るところが一カ所ならサラ金へ連れて行こうと調べることにした。すると、花絵の存在が現れた。良太は心底喜んだ。会えないと思っていた女に東京で会えた。しかも、弟のことを引き合いに出せばきつと自分に身を任せるようになるだろうと。金で近づく女なんかと言いながら、それを利用しようとする自分の心に気付かないそんな浅はかな男が良太なのだ。

そして、そんな折に知ったのがソープのさおりだった。それなのに、またもや正勝の女になった。

正勝の周りにいるイイ女。

良太は正勝に対して言いようのない嫉妬を感じた。

正勝は仕方なく野沢の薬を売るようになっていた。

腰が軽く姉に負い目があり、野沢から逃れられない。

こういう男は使いやすい。

しかも、金を手っ取り早く欲しがるから、少々危ない橋も渡ってくれる。

野沢コーポレーションは裏の顔があった。地上げ屋でも十分裏のような顔なのに、薬品部門というものがあつた。へちま水から始めた自然派化粧品が元手は少ないのに妙によく売れた。妻の商才がなかなかのもので化粧品のパッケージがしゃれていた。そんなそのうちに何でもかんでも自然派と名をつけて食品や栄養剤を売り出したが、儲けを得ると似たような仲間が集まってくるものだ。大麻や覚せい剤になると、桁違いの利益になった。

利益の大きさが野沢たちを狂わせていく
僅か数グラムの薬が毎日毎日面白いうに売れる。幼稚園の送り迎えをする母親も、出勤途中の窓際族も。

こうなると暴力団とのつながりは生まれるものだ。
守り守られ、結束力は高まっていく。

野沢良太はこの甘い蜜によってさらに甘えた人間になっていく。

こう見えても良太は花絵に直接手を出すのはまだ控えていた。花絵の方から懇願することを期待していた。

「弟の借金を許して下さい。私をどうぞ抱いて」
となるはずだった。

だが、父は違っていた。

危ない橋を渡りながら仕入れの大麻の量を増やしていた。それが組織にばれそうになった途端、正勝一人がやったという筋書きを選んだのだ。焼身自殺をさせこの男が勝手にやったことだと。

父は息子に相談などしたことはない。良太は今か今かと金の無くなった裸の花絵を待っていたのに、父の魂胆は全く別のところにあった。

正勝の焼身自殺に一番驚いたのが良太だった。

「父さん、どうなってるんだ。正勝が死んじゃったじゃないか」

「ははは、気の毒だなあ」

その時の父の顔はまるで悪魔そのものだった。だが、不敵な笑みを浮かべる父の横顔に気付いた。

「死んでないの？」

それには答えないが、顔色が変わらない父に正勝の生存をにおわせるには十分だった。

「あの男にはしてほしいことがあるんだ」

葉巻を取り出して吸う野沢の手に、見慣れぬパワーストーンがあった。

「なんだよ、その数珠」

「これか、スモークオーツさ」

「今更数珠でもないだろう」

「これは悪霊払いになるのさ」

「ふーん、悪党が悪霊払いていうのもなんかおかしいぜ」
途端に平手打ちが飛んだ。

「親に向かって生意気なことを言うな！」

唇を切った良太は身をすくめた。父は息子に対しても容赦しない。誰から手に入れたのか知らないが、父の脂ぎった顔はこのパワーストーンによるものかとふと信じてしまう良太だった。

「この石は体にいいのさ」

「ふーん」

父の平手打ちによって鼓膜が破れた右耳は、いつまでも耳鳴りがしていた。

良太はいつか父親を追い越して見せると誓った。

第十四章

エデンは赤いネオンが派手に煌めいて、いかにも女の子がいろんなサービスをしてくれそうな店だった。店の中は薄暗くそれでいて懐中電灯のようなペンライトを客たちが持つている。

そのペンライトをかざして眺めているのは、女たちのエプロンドレスの下だった。

佐木田が入ると、ウェイターのいらっしやいませという挨拶が異様にでかい声だ。

見知らぬ中年男性はどういう人物か分からないからか、ふと、女の子が顔を入口へと向ける。

佐木田はニコニコと笑いながら警戒心を持たせないようにウェイターに近づく。

「いや、出張でね。いい子頼むよ」

「分かりました。タイプは？」

「うん、ちよつと慣れてる方がいいな」

「はい、アケミさん。こっちのテーブルへ」

アケミと呼ばれた女は、フリフリのエプロンが少し似合っているようなアラフォーのように見えた。ボリウムもあって、ひよつとすると、佐木田よりも体重もありそうだ。

「よろしくー。アケミです」

髪は短くパーマをあて、まるでパンチパーマのようだ。化粧も濃く、マスカラがつけ睫毛に重そうなほどついている。赤い口紅が齒に少しついて、いかにも安いキャバレーに来たような気にさせた。

「よろしく。東京から来たんだ」

「あらー、出張何かですか？ 社長さん」

佐木田は社長と呼ばれてもうんうんと頷いて応える。女も言いながらきつと信じてはいないだろう。

お絞りを手際よく開けると、佐木田に差し出す。

「何になさいます」

「うーん、アケミさんが進めるものを」

「あら、そう？」

少し悪戯っぽく笑いながら、佐木田のズボンに手を掛ける。

「まずは飲ませてよ。ビール」

「あら、ここは高いのよ。いいの？」

「ああ、飲みに来たんだ」

アケミは少し上目遣いに佐木田を見ると、こう言いだした。

「あなた、仕事は刑事さん？」

「いや、違うよ」

「そうね、刑事より給料安そうだわ」

「失礼だな」

「でも、こんなことで怒らないから社長じゃないけど自営業ね」

「うーん、いいところを突いて来るね」

アケミは冷えたビールを開けると、佐木田のグラスに注いだ。手慣れたるからきつとこの道は長いんだろう。

「煙草吸ってもいいかしら」

「ああ、いいよ」

アケミは佐木田が何か聞いてくるようだと身構えていた。

「じゃ、探偵さん？」

「うん、それもするけど。便利屋」

「じゃ、引っ越したなんかも手伝ってくれるの」

「ああ、いつでもどうぞ。名刺を渡しておこうか」

佐木田はスリーエス事務所の名刺を取り出した。この女はきっと東京に出てきたときに連絡をくれるだろう。

名刺を面白そうに眺めて、鼻から煙を出した。

アケミの肩が少しいかつくて、これは男かもと感じさせた。

「君はニューハーフかい」

「あら、違うわよ女よ女」

「そうかなあ、この肩が逞しいぜ。しかも声も低い」

「じゃ、遊ばないの？」

ふくれてアケミはそう言った。佐木田は笑いながら、怒るなよとアケミを抱き寄せた。

彼女？彼？どちらにしても、アケミは人がよさそうだった。

「話が聞きたいんだけど。君はこの店で古いかい」

「あああ、やっぱり人探しなのね。つまらないわよ。私みたいな人を指名する人はそんな人ばっかり」

「そうかい」

「ええ、この前も来たわよ」

佐木田の目が光った。

「どんな人？」

アケミは煙草をまた燻らせる。

佐木田は一万円札を出すと、彼女の胸に押し込んだ。

ちらつと見て、アケミは話した。

「まだ、若い子よ。すみれとか花絵とかいう女を探してるって」

「君、その女の子知ってるの？」

「うん。来たのよ。ここで働くんだった。オーナーが仕事教えてやれて。だけど、慣れない感じでね。この店がクラブだと思ってたみたいよ。でもクラブ違いよ、ここは活動する方だから」

と自分でも可笑しくなったのかげらげら笑うアケミ。

「それで、そのすみれとか花絵ってどこにいるの」

「うーん、それが電話で呼ばれちゃって。どこかのホテルだと思うんだけど」

「えっ、出張サービスもしてるの？」

「本当はしないんだけど、オーナーが断れない客の場合はときどきね」

断れないというのは、暴力団関係か。

佐木田はもう一万出して渡した。

「若い子ってどんな子？ 名前とか連絡先は」

「うーん、この名刺ね。野沢良太だって」

アケミはその名刺を渡してくれた。

「野沢良太、あの野沢コーポレーションの息子が」

アケミは頷きながら、多分花絵のいるホテルはここだと思つと、ホテルの名前を教えてくれた。

「私もサービスするわよ。こんなにくれるんなら」

「今度にするよ」

「そう、今度があるのね」

アケミはウインクして悪戯っぽく微笑んだ。佐木田はウェイターにもチップを渡して囁いた。

「ねえ、君、今度もアケミをよろしく。巧いよ」

「でしょう。あの子の右手にみんな痺れるんだから」

佐木田は外に出ると、アケミの書いたホテルへ行くことにした。都忘れという名前だった。

第十五章

佐木田がホテルに帰ると、フロントでこう言われた。

「あの佐木田さん、お連れ様がお先に帰られると伝言がございました」

「え、そうなんだ」

佐木田は久ちゃんが東京に帰ったのを聞いて、部屋のかぎを受け取ると急に疲れが襲ってきた。

「なんだー」

ごろつとベッドに体を預けると、やたらと広いキングダブルサイズが哀しい。

「ちえっ」

久ちゃんはそんな女だ。

甘えてくるかと思うと、すりぬけていく。

相手の重荷になりそうだと感じると、自分の方から誘っていてもするりと離れていく。

体を重ねるなんてことはもう数えるときりがない。

多分、どんなに年老いてもつかず離れずの関係でいるのではないかと思う。

フロントから渡された封筒にはこう書かれていた。

「英ちゃん、先に帰ります。仕事が入ったの。またね。ホテル代済んでるわよ」

そうか、払っていったのか。

決して金が余ってるわけではないが、佐木田に払わせないと決めてあるに違いない。佐木田はため息をつきながら土産を買っていいと思う。

不思議な二人だ。

佐木田は今日一日の疲れをシャワーで洗い流すと、久ちゃんが使った枕に顔をうずめた。

「つまんないなあ」

残り香が佐木田を眠りに誘っていく。

喫茶梓のモーニングタイム。

珍しく藤原組長がやってきた。

「あら、もうよろしいの」

「いや、どうも恥ずかしいな」

照れながら藤原はいつものカウンターに座る。

「佐木田さんは？」

「さあ、どこに行ったのやら」

ママの機嫌が悪いのは佐木田がどうも誰かと一緒らしいことを感じさせた。そこへ石上刑事もやって来た。

「おはようさん」

「おう、藤原さんか」

暴力団の組長と仲良くコーヒーを飲むって許されないことだろうが、この店ではみんな知らん顔だ。誰も何をしているのか一見の客がいたら触れないようにしていた。

「佐木田さんから聞いたけど」

「うん、私の方もね。例の弟の彼女を警護してるんだが」

「どうも、あの弟は薬のほうに手を出しているみたいですね」

「お、藤原さん、やっぱりそうですか」

「ええ、若いもんによつと調べさせてるんだけど。うちはそれをやってないからね、日が掛かるんですよ」

「うーん、こちらもある穴のあいた上着からいくつか分かったこともあるんだけど」

そこへワイワイと言いながら入って来たのは、学生のスポーツクラブの一団だ。

「ママ、どうしたんだよ。この頃若い男の子がやたらと増えちゃったじゃないか」

少し不服そうに藤原が言う。

「そつだよ、若い子はやかましいからな。店の雰囲気がよくないよ」
自分たちのことを棚にあげて二人はママに苦情を言う。

笑いながらママは目で合図する。

「いいのよ、あの人たちは朝のこの時間だけだから。おじさまたちは黙ってコーヒーを飲んでちょうだい」

安いモーニングにパクつく若者は、えりちゃんが配達から戻ってくると一斉に振り向いた。

藤原と石上はそれを見て納得した。

バイトのえりちゃんは体にぴったりとしたジーンズにへそが見えそうなカットソー。爪はブルーに塗られていた。きりつとした顔立ちはこの若者たちの視線をくぎ付けにしたようだ。

「ママ、この頃のえりちゃん、随分ときれいになったね」

「そうでしょう、最近、彼ができたみたいよ」

「やっぱり男か」

石上はそう言うのと、ケータイの娘の待受け画面を見た。

「お、お嬢さんもやがてそういうことに直面するよ」

「何をまだガキなんだから。驚かさないでよ」

藤原と石上は笑いながらコーヒーを口にした。

ふと、藤原のケータイが鳴った。

「あ、どうもすみません」

藤原は組長なのに、非常に礼儀正しくて、ケータイを持つと外に出ていった。

「ああいう人ばかりだといいんだが」

石上は呟いた。ママはえりちゃんとせつせとサラダを盛りつけていた。

ブルーの爪のえりちゃんはカップにコーヒーを注ぐと、手際良く若者たちに運んでいった。

一人ひとりが嬉しそうにえりちゃんからプレートを貰う。

華やいだ雰囲気が梓の店内を明るくしていた。

入り口の外でケータイを持つ藤原の相手は遠藤だった。

「わかった。あとで行くから勝手に動くなよ」

藤原は切ったあとも何か考えているようだった。

「ちよつとやつかいなことになりそうだな」

藤原はポケットから別のケータイを取り出すと電話を掛けた。

「野沢さんですか。東京の藤原ですが、ちよつと話をしたいのが時間を作っていただけますか」

言葉は丁寧だが、断れない雰囲気^が声に表れていた。

第十六章

高田雷太は姉の五月に話していた。

「姉ちゃん、頼むよ」

「嫌よ、あんな男と映画なんて」

「一回でいいんだ」

「バカね、あいつの一回は一生ということよ。それぐらいわかんないの」

だが、このまま新太郎を拒むと自分が何をされるかわからない。一度でいいという言葉を感じたかった。新太郎は手に入れるまでしつこいということはわかってるが、姉の五月の強さにも期待していた。賢い姉なら何とかしてくれるかもしれないと、甘い考えを持っていた。

野沢コーポレーションの倉庫前にはもう新太郎がいつもより服装を整えて立っていた。

「おい、五月は」

「あ、あのちよつと忙しいって」

新太郎は返事を聞くや否や雷太の鳩尾に蹴りを入れた。

「いつまで待たせるんだよ。今日連れて来るって言ったよな!」

一瞬息が止まった。

呼吸ができない恐怖に起き上れない。

さらに立ち上がらせて、思い切り平手打ちをする新太郎。

「ただじゃ済まないぜ。おい。俺を舐めてんのか」

「そんなことは……決して」

「だろう? 一回でいいって言っただろ。俺は約束を破ったことあるか?」

約束だっただけではない。いつも新太郎が一方的に物事を決め、守ったのは雷太なのだから。

すると、二人の前を一台の車が止まった。

左ハンドルのでかい黒塗りの車。

パワーウィンドーを下ろして中から声がした。

「おい、止めてやれ」

「うるせえ、首を突っ込むな」

粹がる新太郎に車の中の男はやれやれと言いながら窓を閉めた。

二人の男が下りてきて、いきなり新太郎を押さえつけ、左手の肘を反対側に捻った。

「うわあああああ」

新太郎の悲鳴とともに鈍い骨の折れる音がした。

「ここはうちの敷地なんだから、勝手に侵入されると困るんだよ」
中から笑い声と共に火のついたタバコが新太郎に落とされた。

「あちちち」

払いのける新太郎の目は完全に恐怖に満ちていた。

雷太はこの助けてくれた危ない男を、恐ろしくて見ることもできなかった。
新太郎にも触れることができなかった。

やがて、倉庫を開けると、男たちは入って行った。

倒れている新太郎をそのままにするわけにもいかず、雷太は近寄った。

「新太郎さん」

「おい、あいつら何者だ」

「ここの倉庫の持ち主って」

「とんでもないやくざだぜ」

自分のことはさておき、新太郎は骨折した左手をそつと握った。

「病院へ連れて行ってくれ」

「後ろに乗れますか」

痛みで萎れている新太郎は大人しくバイクの後部に乗った。雷太はこの調子なら五月のことはしばらく言わないだろうと感じた。何しろ、この骨折は捻っているから複雑骨折に違いない。この腕では女を抱くことはできないだろう。

無様な新太郎は暴力に弱いのだ。自分より強い奴にはこんなにも

弱い。そう思うと雷太はこの男との付き合い方を知った気がした。

寺田の母親は今日もネコのミーコを膝に抱いて、息子と話していた。

「ねえ、私の煙水晶を知らないかい」

「母さんの煙水晶って、あの数珠のこと？」

「うん、見当たらないのよ」

「また、どこかに置き忘れたんじゃないのかい」

「ううん、あれは父さんの形見だから大切にしまっていたのよ」

寺田宝石店を開いた当時、まだ若かった父親が香港で手に入れたのだった。ペンダントとお揃いの数珠。煙水晶は悪運を払うとか金運を掴むとかいわれ、事業を始めたばかりの寺田の父親が買ってきたのだった。しかも店には置かず、妻に渡したのだ。あとにも先にも宝石を渡したのはこれが最初で最後だった。

「いつからないの？」

「それが分からないのよ。月命日に御経を唱えようと思って抽斗を開けたら空っぽなの」

「どこかにあるはずだけどな」

「祥子さんが来た時から」

「また、そんなことを。いい加減にしろよ。スモークオーツを盗らなくても、ダイヤがいくつでもあるんだから祥子がするわけないだろ。だから、出ていったりするんだよ。母さんのせいだ！」

まだ、言いたそうな母親の言葉を絶ち、寺田は立ち上がった。

祥子がいらないことを母親のせいにすることは卑怯だと思うが、今の寺田は余裕がなかった。

ネコが嫌いな寺田は足元をすりぬけていくミーコにドキッとした表情を見せた。

「あの煙水晶はそこいらで買える代物じゃないのよ」

「まだ言っの」

大きくため息をつきながら、母親はこう言った。

「佐木田さんなら探してくれる」

「バカなことを」

そう言いながらもそれで母親が納得するならいいかとも思った。

「じゃ、電話でもしてみたら」

「そうね、そうする」

明るい声になった母親は、やっと同意を得た息子の言葉に嬉しそうだった。

その様子を見ると、寺田はどこかホッとする自分を見出した。

第十七章

寺田祥子は大阪にいた。

夫から貰った物や寺田の母親のところにあつたアクセサリー。

スモーキークォーツの数珠も。

「この大きさのスモーキーは滅多にないわ。でも、二つも持っているなんてどうなの。もう、あの人はボケてきてるからどこに置いたか忘れてるはず」

男物と女物の数珠二本があつた。一つは男にあげた。

薬を回してくれる野沢に。

風水を信じるわけではないが、最近夫の店でもいろいろと風水のブレスレットも品ぞろえしてきたが、これほどの美しいスモーキークォーツは見ない。

ローズクォーツや水晶はよく見るが、このスモーキーだけというのはない。

しかも、このアルミが妖しく光るのがたまらない。

初めは渡すつもりなどなかったが、野沢は祥子の手に光るその数珠をいたく気に入ってしまった。

「おい、この石は面白いじゃないか」

「ええ、義父の形見」

母親の抽斗から盗んだとは口が裂けても言えなかった。

野沢は祥子の裸の背中をポンポンと叩きながら、なかなかいいものじゃないかとしつこく言った。

「滅多にないものよ。しかも形見なんだから」

「今更、親の形見なんて言葉、祥子の口から聞くとはなあ」

「何よ、私だつていい嫁なのよ」

野沢はげらげらと可笑しそうに笑いながら、祥子の話を全く信用していないようだった。

「これをくれたら、薬を倍渡してもいいよ」

「ホント？」

「ああ」

祥子は背に腹は代えられないと義父の数珠を渡した。

「悪霊を払うとか金運がつくとか体調がよくなるとかいっから」

「ほう、それはいいな。どれ、これをはめたらもう一回できるかもしれないぞ」

「いやあね。そんなことに使わないで」

髪をあげながら、項にキスをする野沢の舌がぬめぬめとして、祥子は一瞬蛇が這っているかのような錯覚がして体が震えた。

「お、感じているのか」

野沢は勘違いされてるとも知らず、祥子の乳房を勢いよく吸いあげた。

「痛い」

さらに、野沢は乳首がちぎれるほど噛みついて、祥子の苦悩に満ちた表情を弄ぶ。

野沢は祥子の口に一錠入れてワインを注ぐ。

げぼげぼとせき込みながらも祥子は呟いた。

「地獄と天国は隣り合わせね」

「ああ、いいものだ」

スモーキークォーツの光の中に祥子はいた。

この光が妖しく光る間、祥子は無重力のようなふわふわとした心地よさの中にいた。

中田の顔もいつしか薄れ、寺田の視線も遠ざかる。

もう誰にも左右されない。

そう感じながら、野沢の汚い策略に陥れられてるとは気付いていない。

寺田宝石店の店は一等地にあり、野沢はあの一帯にマンション立地計画を進めていた。

祥子が目が覚めた時、すでに野沢の姿はなかった。

あれほど無重力と感じたのに、今は体が鉛のように重い。

いつの間にか量が増えていく。

野沢に勧められるままに飲んでしまう。

縋るかのように探すスモークオーツの数珠。

義母の数珠だけが手元に残った。

慌てて左手にはめる。

冷たい感触が心地よい。

義父のほどは大きくないが、手を入れたときから暗示なのだろうか、体がすくつと立ち上がるような気になる。

「この石には不思議な力があるのね」

シャワーを浴びながら中田に電話をしようと思っていた。

一人より二人、自分の周りの男を惹きつけたかった。

手に入れるともうどうでもよくなる。

中田だって愛してるわけではない。

寺田だってそうだ。

野沢も。

昔からそうなのだ。

信頼していた友人の兄から乱暴されてから、誰も信じてはいない。

まだ、中学生だったのに。

それからは怖いものなしになった。

その相手でさえ、脅すことができるようになった。

「私を乱暴したって言うわよ」

恐怖にひきつる顔。

「世の中は脅したもん勝ちよ。力のある者に屈服するのよ」

祥子は勝手に悟った。

脅される前に脅せと。

体で負けても懷で勝つのだと。

だが、祥子はこのクスリに侵されるということにまだ気づいていない。

野沢は地上げの材料に必ずこの方法を用いてきた。

転居に応じない住民には、いつの間にかどこからか潜入して一人

を中毒に。

特に主婦はこの罠に陥りやすい。

弱さにつけこむことに長けている男なのだ。

あとは簡単に印鑑を押してくれるようになるものだ。

接点が警察にばれなければどこまでも合理的に話は進む。

野沢の目は獣の目だった。

第十八章

中田は祥子から連絡がないので途方に暮れていた。

あの女から得たエクスタシー。

そう、一度味わうと癖になって来た。

薬を覚えておきながら連絡を絶つ祥子。

相手は人妻だからこちらからの連絡はしなかった。

祥子に夢中になるとは考えられなかった。だが、彼女の持つてきた薬は中田をいつの間にか惹きつけた。二度が三度になると、あれを使わないセックスなど考えられない。最近はある薬を飲んだだけで快感が味わえる。

若い時にやんちゃしても、シンナーなどは手を出さずに来た中田。あの女が教えたのだ。悪徳の媚薬。

店を開いてから結構軌道に乗り、何事もうまく回って来たはずだったが、だが、最近この辺り一帯にマンションを立てる計画が持ちあがっていると言う。この街でマンションができれば相当高いものになるだろう。あり得ないと思っていたのだ。だが、違っていた。近くの不動産屋に尋ねると、野沢コーポレーションが動いてるようだという話。

あの正勝の事故の相手か。妙な胸騒ぎを覚えたが、もう解雇した男のことなど早く忘れるしかないと思っていた。

祥子が野沢と寝ているなどということは想像すらできなかった。

祥子もまた、野沢によってエクスタシーを覚えた女だった。

初めは宝石の見本市で知り合った。

寺田の家は明治から創業している老舗だ。そんな寺田に近づいて来たのが野沢だった。

寺田の店は今でも若い子が来るような店だが、そんな一角に建て

ることに意義がある。マンションの箔が付くというものだ。

その日から野沢の祥子に対するアプローチが始まった。鈍感な寺田はそんなこととは露知らず、野沢のニコニコとした態度に好感すら持った。

「寺田さん、支店というものは考えていませんか」

本店すら乗っ取るうと考えている野沢の思惑など知る由もなかった。

「支店ですか。祥子、どう思う？」

「あら、私にやらせてくれるの」

「こんな綺麗な奥様がいるなら、店を任せるのもいいですよ。きっと流行りますよ」

そんな甘い口に寺田の心は揺れていた。

「はあ、だが、あの店も未だに母のもんですからね」

「お母様のですか。ほほう。寺田さんは親孝行ですね」

野沢は寺田の母ならさぞ高齢だろうと読んだ。

祥子に熱い視線を送りながら、心はその先を冷たく見据えていたのだった。

祥子の気を引くのは簡単だった。女としてのプライドを立てれば至極簡単に物になる気がした。

プレゼントの数々や、豪華な食事。やがては二人だけのデート。そしてエクスタシー。

あの錠剤は祥子の持っていた淫靡な女の部分を開花したようだった。

寺田に隠れて会ったたびに祥子はねだるようになっていた。

「いいかい、この辺のちっぽけな店を撤去して、お洒落な街並みにするんだよ。いい案だろ」

「だけど、なかなか立ち退きには応じないわよ」

「お前の旦那の店も邪魔なんだよ。その代わり、億単位の金が入るぜ」

祥子の目がキラッと光る。

「ホント？」

「ああ、そうしたら旦那と別れても優雅な生活ができるぜ」

「あの人は優しい人よ。保険としてとっておきたいの」

「お前は相当なワルだな。だが、あの店は母親のものなんだろう」

「もう、だいぶボケてきたからどうにかなると思っわ。その代わりに、もつと薬を調達して」

「おいおい、勝手に使つと危険なんだぜ」

「そんなことしないわ。でも、あなたと会わない夜には欲しいの。一人で使うの」

「中毒になつてしまふぞ」

「それがお望みでしょ」

「人聞きの悪いことを言うなよ」

凶星だった。祥子は鋭い女だ。だが、もうそんなことはどうでもいいことだった。野沢は祥子を寺田の店を手に入れるまでの道具くらいにしか考えてはいなかった。

祥子も野沢の体や地位が欲しいのではなかった。

ただ、人を信用しないで生きてきた女の嗅覚は寺田を選んでいたので。そして、野沢の意志通りに中田に近づいたのだった。

中田はいい男だが、あの男も祥子と一緒にしろとは考えていないだろう。

自分の周りに来る男はすべていい加減な気持ちでしか付き合わないのだ。

寺田を愛しているかと言われれば、多分と応えるだろう。

だが、寺田にしても母親に優しく祥子の言いなりには簡単にはいかないだろう。

ベッドで野沢の肩越しに見える夜のネオン。

寺田の母親のスモーククォーツが妖しく光った。

第十九章

佐木田は東京に帰っていた。花絵の弟探しがいつの間にか花絵まで探すことになっていた。

梓のドアを開けると、えりちゃんとママがのんびりしていた。

「どうしたんだい。随分暇な店になってるじゃないか」

「そうよ。アメフトクラブが合宿に行ったから、暇になったの」

「まあ、いいじゃないか。たまにはのんびりしたら」

「佐木田さんはそう言うけど、こんな小さな店は固定客が来なくなったらおしまいよ」

「それなら僕がいるじゃないか。立派な固定客」

笑いながら注文する佐木田。

えりちゃんは早速コーヒーを淹れる。

「そんなこと言っても佐木田さん一人ではねえ」

ママはため息をつきながら言う。

すると、そこへ石上がやって来た。

「ほらほら、固定客がまた来たぞ」

「なんだい？ 僕の噂でもしていたの」

「石ちゃんようこそ。もう佐木田さんだけなら店も閉めようかと思ってましたわ」

「おいおい、そんなに言わなくてもいいだろう」

石上はニコニコしながらカウンターに座った。

「ところで、佐木田さん。あのさおりさんんだけど」

正勝の子どもができてるさおりは今花絵のアパートにいた。石上刑事も話を聞いたようだった。

「ええ、どうですか」

「うん、あの子は正勝の行方を知らないと言ってるが、妙に怪しいよ」

「どうしてですか」

「宅配便が来たんだけど代金引換でね、大阪の尾藤産業というところから」

「はあ。初めて聞く名前ですね」

「うん、どうもその住所を調べてみたんだがデタラメでね」

「ええ。なんでしょうね」

「普通怪しいものは受け取らないだろ。だが、受け取って代金を支払うんだよ。どうも薬関係と思うんだが」

「それって、麻薬ってことですか」

「まだ、はっきりしないが、その可能性もあるよ」

「妊娠中ですよ」

「彼女が使うかどうかはわからないよ。売るのかもしれないし、頼まれてるのかもしれないだろう」

佐木田はふとあの顔色の悪いさおりを思い出していた。

石上はため息をつきながらコーヒーを飲んだ。

「男も女もどんな出会いで人生が変わってしまうのかねえ」

梓のママは焼いたトーストに手作りのジャムをつけてくれた。

「美味しいわよ」

「今日はサービスがいいな」

「ええ、暇を持て余してるからよ」

ニコツと笑うとえくぼの出るママは愛嬌があって、若者から中年男性も少しときめいてしまう。

石上は美味しそうに頬張りながら、懷から写真を出した。

「この人は知ってるかい」

どこかで見た顔だ。

佐木田は思い出そうとするが、すぐに名前も出ない。最近は何事もないようになった。

「うん、見た顔なんだけど、思い出せないな。誰だっけ」

「この人がさおりの部屋に訪ねてきたんだ」

佐木田はこの女性と話したこともあった。

「ああ、寺田宝石店の店員ですよ」

「えっ、あそこの？」

「ええ、そうです」

若い彼女がなぜ花絵の部屋へ。さらにさおりに用があるのか。その接点はまるで思い浮かばない。

ただ、あの東京から大阪へ向かう日も不思議に思ったのは事実だった。

佐木田はトーストを口にくわえて、ポケットからケータイを取り出した。

大阪へ向かう日に電車の中で青のオーストリッチのバッグを提げ、寺田宝石店の紙袋を持っていた彼女が男に紙袋を渡したのだ。その時に撮った写真がケータイにあった。

「この男に渡したんですよ」

「どれどれ」

石上はケータイ写真を自分のケータイに取りこんだ。

「知ってますか」

「いや、まだ分からないがちょっと調べてみよう」

「なかなか綺麗な子でしょう」

「ああ」

横からママまで覗きこむ。

「あら、誰なの」

「寺田宝石店の店員さんだよ」

「こちらは誰？」

男の方を指さすママ。

「分からないんだよな」

「ふーん、寺田宝石店の奥さんは見つかったの？」

「まださ。だから僕は忙しいの」

「あら、暇そうに見えるわよ」

口の悪いママに苦笑いをしながら佐木田は石上にこう言った。

「寺田宝石店と正勝の接点がありそうですね」

「ああ、この店員が何か知っていそうだな。聞いてみってくれる」

「ええ、まだ警察が動くより僕の方の調査とした方が油断して話してくれそうな気がします」

えりちゃんがこぶ茶を淹れてくれた。

「どうぞ。私の母が送ってきたの。召し上がってください」

「おお、気がきくなあ」

石上と佐木田は温かいこぶ茶を美味しくそうに飲んだ。ママは昼食の日替わり定食のフライに取りかかっていた。

「佐木田さんと石上さんはお昼は取っておきましょうか」

「ああ、頼むよ」

石上は即座に返答した。

佐木田は席を立ちながら

「僕は昼は来れそうもないから」とママに言った。

「じゃ、石ちゃんに二人分つけちゃおうかな」

「おお、サンキュー」

石上は本当に嬉しそうにピースサインをして佐木田と出て行った。

第二十章

佐木田と喫茶店で向きあうのは、寺田宝石店の従業員だった。

「なあ、もうそろそろ話してくれないか」

従業員の下山京子はうつむいていた。

その手はギュツとハンカチを握りしめていた。

「君は一体誰なんだい」

「えっ」

「ただの従業員ではないよね」

口をぎゅつと結んで眼を伏せる京子。

「あそこの奥さんがいなくなってることは知ってるんだろ」
頷く京子。

「この前、偶然君を見たんだ」

ケータイの写真を見せる佐木田。

「この人に袋を渡しただろ」

青ざめる京子。微かに震える体。

「奥さんの失踪に何か関係してるの？」

「いいえ。私は何も」

「だけど、この日の君の持って行った品物は高いダイヤの指輪だったよ。宝石店で確かめてきたんだ」

見せる帳簿の写し。

代金は二百四十五万。

買った人は池田正太郎。

「別にどなたに売っても関係ないことです」

「それはそうだけど、渡し方がおかしくない？ お得意様だったら家に届けるんじゃない？」

「相手の方のご希望にするのがこちらの務めですから」

「それはそうだけど。あんな電車の中で高級品を渡すなんて」

「社長もご存じです」

「うん、そうだね。池田って誰ですか」

「そんな詳しいことまでは知りません。代金は即金でしたから」

「そのお届けが電車って」

「ですから、指輪のサイズ直しがあつて家よりここがいいということでしたから」

「あの中身は指輪だけかな」

口をつむる京子。

落ち着かせようとコーヒを飲もうとするが、カタカタと震えて音がする。

佐木田はその様子を見て言った。

「ねえ、下山さん。寺田宝石店は業績も伸びているけど、他にも仕事してない？」

「知りません」

佐木田はこの女性はいつか話してくれる気がした。

「下山さん、奥さんとは親しかつたの」

そう尋ねると、京子は笑って首を振った。

「あの奥さんと気が合う人は社長くらいでしょう」

「どうして」

「いつも居丈高で、私などを顎で使う人ですから」

「そんな奥さんにどうして社長は惹かれるのかな」

「知りません。男と女のことですから」

「そうだね、君は恋人いないの」

「お話はそれだけです。失礼します」

きりつとした表情で佐木田を見ると、冷静さを取り戻した京子はそう言った。

佐木田はありがとうと礼を言うと、もうひとつ尋ねた。

「あの店を買いたがってるという野沢コーポレーションの話は聞いたことがあるの」

「ええ」

「寺田さんは売る気あるのかな」

「ないですよ。あの店は業績もいいから」

「奥さんもかな」

顔がゆがんだ。明らかにそれは祥子が売りたいがってるという話に見えた。

「知りません。でも、あの店を売れば凄まじい大金が入って来るのは確かです」

「そうだね、あともう一つ。矢野花絵さんのこと知ってるの」

「誰ですか」

「君が訪ねたアパート」

「ああ、社長に頼まれて届け物をしました」

「あ、そう。どういう知り合いかな」

「さあ、そこまでは」

「何を届けたの」

「知りません。お菓子だと思いますけど」

「ふーん。お菓子か、なぜそう思うの」

「包み紙がそうですから。ではこれで失礼します」

京子は立ち上がると店を出て行った。

佐木田は煙草を取り出して一服しようとしたが、この店は禁煙だとウエイトレスが済まなさそうに近づいて言った。

「ああ、ごめんごめん」

慌てて啜えた煙草を元に戻して、佐木田はコーヒーをもう一杯注文した。

祥子が店を売りたいがっているのか。

そして、あの紙袋に何が入っていたのか。

どうも指輪だけではなさそうだった。

ひっかけたつもりが意外なところから、何かでつかい魚を釣り上げたような気になった。

寺田自身も叩けば埃が出てくるのかもしれない。

ネコのミークがいないと電話してくる母親。

そう言えば先程も電話があった。

あの家に行けば何か分かるかもしれないと、佐木田は予想以上に熱いコーヒーに舌うちしながら思った。

石上は佐木田と話した後、早速調べていた。

ケータイの写真は野沢コーポレーションの秘書だった。

名前は池田正太郎。だが、この男は不思議なことに野沢コーポレーションの中では仕事ができるという男だった。悪どいという評判の社長を裏で支えるずる賢い秘書。

その彼がいるから業績も伸びているというのだ。

もちろん、社長のやり方に真っ向から反対するほどのバカではない。巧く立ち回る狡猾さも持った男なのだ。頭のよくない息子より次期社長は池田だという話が業界では噂されていた。

石上刑事の持つファイルには赤い付箋がいくつかついていていた。

それは野沢の事業の進め方に対し、汚いと評判になった例がいくつもあった。起訴こそされなかったがいつも噂が絶えないのだ。

「もう一度調べ直す必要があるな」

石上は弁当を開いて苦笑した。

鮭の塩焼き、いんげんの胡麻和え、キュウリの酢の物、プチトマト。そして俵型のおにぎり。ダイエットしろと言っても聞かない夫にこのあつさりメニュー。

「こつてりと味付けしたものが一品は欲しいよ」

愚痴を言いながらも妻の作った弁当を頬張るしかない。

もう小遣いは二千円しか残っていなかった。

第二十一章

佐木田が梓でコーヒを飲んでいると、久ちゃんから電話がかかった。

「英ちゃん。都忘れって知ってる？」

ドキツとした。

この前花絵がいるはずだと思ってエデンの帰りに寄ったのだが、満室で話も聞けなかった。

「場所は知ってるけど、従業員も忙しそうで相手してくれなかったんだよ」

「花絵さんの忘れ物を預かってるって電話があつたの」

「ホテルだって言ってもあそこはラブホテルだぜ。連絡なんかしないだろう」

「だから、花絵さんの友だちって人から」

「品物は何だい」

「それがケータイの入ったポーチ」

「その友達は名前は？」

「アケミさん」

そうか、アケミだ。エデンのアケミ。思い出した。佐木田はあの日のアケミの話を思い出していた。花絵はアケミと一緒に働くはずとか言っていた。

久ちゃんの店を教えたので、アケミはやってきた。

「あら、佐木田さん。いらっしやい」

久ちゃんはエツチな客に絡まれて腹を立てていた。だが、酔っぱらった客はホステスが怒っていようとお構いなしだ。

「はいはい、ボトルを入れてくれる」

「ああ、いいよ。でもチューしてくれないと入れてあげないぞ」

久ちゃんはため息をつきながら席を立つ。

「ボトルチャージよ。会長さん」

マスターにやたらと大きな声で注文する。マスターも困ったものだねと言いながらボトルを渡す。

「会長さん、フルーツもいいかしら」

「ああ、いいよ」

酔った会長は久ちゃんの力モでもある。フルーツほど値段がいい加減なものはない。

お勘定にドンドン加算されるが会長はどうでもいいようだ。

佐木田はそんな彼女の働き方を見ながら、流石だなと思っていた。久ちゃんはやはりプロだ。

酔った客のあしらい方も怒らさず、かといって自分を安く売ろうとはせず、席を立ててフルーツやボトルを注文させる。すご腕だ。

「いつ来るって？」

「お客さんの同伴で来たから、十一時ごろに寄るって」
あと三十分ほどだ。

佐木田のケータイが鳴った。

「もしもし石上だ」

「はい、お疲れさんです。遅いですね」

「あのね、花絵さんが見つかった」

「あ、そうですか」

「それが死んでるんだ」

佐木田は震えてきた。まだ、彼女には何も報告できていない。金だつて貰っているのに。弟の方を探してほしいと言った彼女がどうして死ぬことになったんだろう。

「石上さん、場所はどこですか」

「海に重しをつけられて。たまたま、バカなカップルがアクセルとブレーキを踏み間違えて海に突っ込んだら、底に花絵さんがいたんだよ。警察も車を引き揚げるときに海に入って発見したというんだ」
「いつ殺されたんですか」

佐木田は喉がからからに乾いていた。

「いやあ、まだ検視結果が出ていないけど、いなくなってから間も

ないから」

弟を見つけてくれと言われていたのに、大阪へ行くとなった時からもつと話を聞いていればよかったと佐木田は肩を落とした。

石上が検視結果がわかったら連絡するという言葉聞いてから電話を切った。

「どうしたの」

顔色の悪い佐木田を心配して久ちゃんがやって来た。

「花絵さんが死んだって」

「そんな、どうして」

言葉にならないほど動転して久ちゃんは泣きだした。

マスターまでどうしたのと聞いて来る。

「花絵さんが死んだって」

みんな顔色が青ざめていくのに、酔った会長は一人楽しそうに叫んでいる。

「久ちゃん、早くここに戻ってよ」

会長はマイクを持って待っている。いつものデュエットと一緒に歌おうと見えない目でリモコン操作をしている。

かかったのはピンクレディーのUFO。

「会長、うるさい！」

思わず久ちゃんが怒る。

「ごめんごめん。銀恋を歌おうと思ったら間違えて」

マスターが慌ててリモコンで銀恋を入れる。

「仕事仕事」

久ちゃんは自分を鼓舞するように会長の隣に立った。肩を抱く会長。

佐木田はそのときに入口に誰か入ってくる気配を感じた。アケミだった。

「いらっしやいませ」

マスターが言うと、佐木田はアケミのところへ行き外へ誘った。

「あら、いいお店なのに」

「いや、今取りこんで」

「あの花絵さんの忘れ物」

バッグから出したのは花絵のポーチだった。

「ポーチの中にこの番号が入っていたから電話したの」

「僕がうかがった日の後、花絵さんに会ったの」

「ええ、次の日に泣きはらした顔で来たわよ」

佐木田は心の底から後悔した。あのホテルに行った時にどこかの部屋にいたのではないだろうか。花絵が泣きはらした顔できたという話は、心臓をえぐられるように佐木田の心を突き刺した。

そして、花絵が頼んできた一件は必ず守ってやろうと決めた。

『このポーチを忘れるというよりは、これを預けて行っただけではないだろうか』

身の危険を感じた花絵が、久ちゃんか佐木田に何か残していかうとしたのではと考えた。

ポーチを改めて見ると、コンパクトと口紅。ケータイと薬。

この鮮やかな色の薬は病院で処方されるものではないとすぐに分かった。

この新宿でもよく売られている。

ケータイの電話帳は佐木田とこの店と久ちゃん、そして自宅、ここにはさおりがいる。弟の番号、そしてもう一つあった。野沢とある。

息子かそれとも社長か。

空っぽになったと思ったポーチをひっくり返すと、コロコロと何かが転がった。

拾い上げるとうすい茶色のビーズのようだ。

アケミがスモーキークォーツだと呟いた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0130x/>

スモーキークォーツ

2011年11月2日14時14分発行